

第3章 壱岐市内にある文化財の総合的把握

第1節 既知の文化財

旧4町から引き継ぐ壱岐市の指定文化財、登録文化財は次のとおりである（巻末資料に一覧を付す）。

国指定	特別史跡 1件（原の辻遺跡） 有形文化財 4件（典籍 1、考古資料 3） 無形民俗文化財 1件（壱岐神楽） 史跡 2件（勝本城跡、壱岐古墳群） 記念物 1件（辰の島海浜植物群落）
国選択	無形民俗文化財 1件（壱岐の船競漕行事）
国登録	建造物 4件〔旧松本薬局、碧雲荘（旧熊本家住宅）ほか〕
県指定	有形文化財 13件（建造物 1、絵画 1、彫刻 6、工芸品 4、絵・工・古 1） 史跡 6件 記念物 12件
県景観資産登録	建造物 10件 （内、1件は国登録文化財、1件は市指定有形文化財）
市指定	有形文化財 79件（神社 7、寺院 1、住居建築 1、絵画 5、彫刻 24、 工芸品 16、書籍 1、典籍 3、古文書 5、考古資料 13、石造物 1、 記念碑 2） 有形民俗文化財 38件（衣装、住居 4、漁労用具 2、石造物 20、絵馬 6、 神楽面 4、位牌 1） 無形民俗文化財 8件（年中行事 8） 記念物 44件（植物 8、地質鉱物 1、遺跡 2、古墳 7、城跡 2、役所跡 1、 社寺 11、納屋場跡 1、屋敷跡 1、墳墓 9、湧泉 1）

指定文化財等集計表

種別	国指定	国選択	国登録	県指定	県登録	市指定	計
有形文化財	4		4	13		79	100
有形民俗文化財						38	38
無形民俗文化財	1	1				8	10
記念物	4			18		44	66
登録景観資産					10		10
計	9	1	4	31	10	169	222

（県登録景観資産は2件が他と兼ねるので、数値合計より2を減とした）

また、日本遺産「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」として、壱岐では次の文化財が認定されている。

勝本城跡	壱岐古墳群	双六古墳出土品	笹塚古墳出土品
生池城跡	原の辻遺跡	原の辻遺跡出土品	カラカミ遺跡
岳の辻	内海湾		

さらに、世界の記憶として『土肥家文書』のうち朝鮮通信使にかかわる「朝鮮通信使 迎接所絵図」が選定されている。

第2節 文化財調査方法

暮らしの積み重ねが地域文化として色濃く残る壱岐市には、数多くの文化財が残っているため、まずは総合的に把握し、まとめていくことが必要である。この調査は次のように大きく分けて行うこととする。

① 島内文化財等悉皆調査

指定文化財や登録文化財のみならず、文献等に記載されている未指定文化財や民俗行事等についての現状確認を行い、当時の記載内容との相違や変更点などについて調査する。

② 埋蔵文化財現状確認調査

遺跡台帳に記載された周知の埋蔵文化財包蔵地についての現況確認を行い、また過去に行われた発掘調査の情報整理を行う。同時に過去に行われた調査と状況比較を行う。

③ その他

これまでに発刊された文献をもとに、当時の様子と比較しながら現在に残る文化財を調査する。

広く市民から聞き取り調査を行い、新たな情報を収集するとともに文化財についての周知や保護についての理解を求める。

- 博物館等で行う講座等
- 市民へのアンケート調査
- 来島者へのアンケート調査
- 島外でのアンケート調査

調査後は文化財を種別・地域等によって整理し、広く公開に努めるが、個人所有物件については所有者の承諾を得ることとする。また指定文化財についての見直しを行う。

特に「壱岐らしさ」を物語る文化財については次節に定義する『壱岐遺産』として広く紹介していく。

第3節 壱岐市における文化財の抽出基準

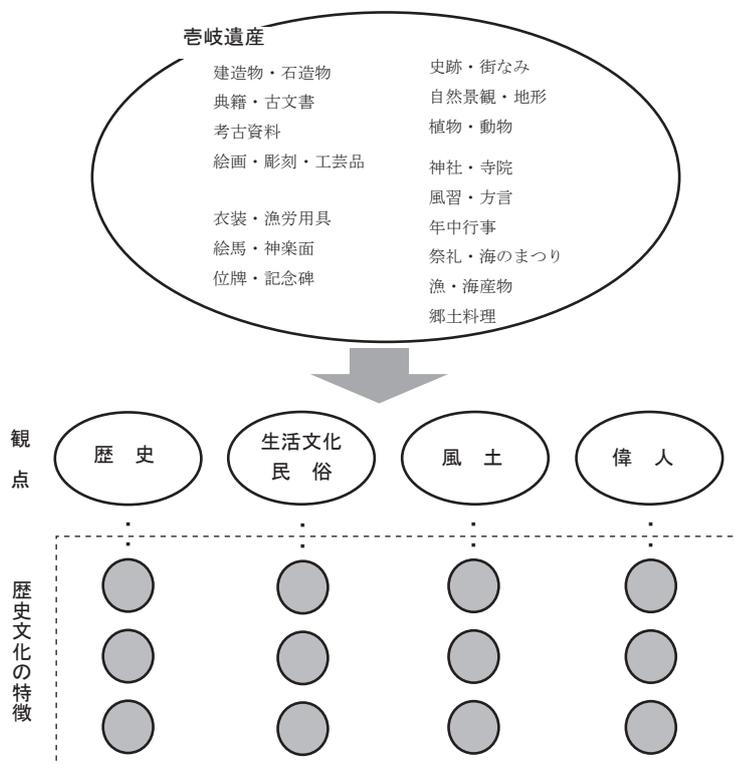
この計画で扱う文化財は、既知の指定文化財や登録文化財に加えて、既往の指定基準にとらわれず、壱岐の歴史や文化に係る事象を広く抽出することを目指す。そのため、全てを「壱岐遺産」として取り扱う。この壱岐遺産に選定する事象について次のように定義する。

壱岐遺産の定義・抽出基準

- ・ 壱岐の歴史や文化を語るうえで顕著なもの
- ・ 文化の成り立ちの背景となった自然や風土
- ・ 壱岐の生活に培われてきた伝統的なもの
- ・ 失われた、または失われつつある伝統的なもの
- ・ 歴史や文化に係る地域の人々が大切に思うもの
- ・ 島外からみて特徴となる歴史や文化に関連するもの

第4節 壱岐遺産の捉え方

壱岐遺産の文化財としての種別は、有形文化財、史跡、有形民俗文化財、無形民俗文化財や、自然、郷土の名物など、多岐にわたる。これらを歴史、生活文化・民俗、風土、偉人の観点から総合的に捉え、壱岐らしさを物語る歴史文化の特徴を抽出する。



① 歴史の観点

壱岐は九州本土と朝鮮半島の間には浮かぶ辺境の島であり、古代から対馬とともに日本と海外との交易の中継地として重要な位置にあった。大陸・朝鮮半島との中継地として栄えた古代の壱岐。また異国に近いゆえに翻弄された歴史や、日本と外国の文化の架け橋としてあり続けたことが特徴となる。さらに、壱岐の成り立ちには中世の戦国時代の様相や近世の平戸藩による統治が深くかかわっている。

このような事柄を次の4種の項目に集約し、歴史の観点から見た特徴の類型とする。

- A. 一大勢力を誇った古代壱岐
- B. 信仰とまつりの島
- C. 辺境の島であるが故の光と影
- D. 壱岐の政（まつりごと）

② 生活文化・民俗の観点

壱岐では、港に営まれる漁村集落を「浦（うら）」と呼び、内陸の農村を「触（ふれ）」と呼ぶ。江戸期には触に60～300戸の農家があり、サスガシラ（百姓頭）が触れて回る範囲であったと云われている。この触をいくつかまとめた単位を「在（ざい）」と呼び、それぞれに庄屋が置かれた。

浦には海に囲まれた島ならではのくらしがあり、捕鯨や海士・海女、海の祭りなど特徴ある伝統や鯨組の遺構、また文献史料などが残されている。

また、長崎県第二の平地である深江田原に代表されるように、島でありながら農地に適した肥沃な土地に恵まれている。触・在では農作のなかで培われたくらしやまつり、また散村の風景が特徴となる。さらに、生活に深くかかわる年中行事や、海産物・農産物を用いた郷土料理、独特の方言や地名に壱岐らしさが表れている。

生活文化・民俗の観点からは、次の3項目を壱岐の歴史文化を表す特徴の類型とする。

- E. 玄界灘に培われた海のくらし。浦のくらし
- F. 肥沃な農地に伝わるくらし。在・触のくらし
- G. 豊かな島に育まれた生活文化

③ 風土の観点

壱岐には高い山が少なく岳の辻（標高約213m）が最高峰で、全体になだらかな地形である。一方、海岸には断崖が多く、猿岩などの奇岩や特徴ある岩脈が知られているほか、湾を利用した港が特徴ある景観をつくっている。また、温帯の照葉樹林が島の植生の基盤をなすほか、海浜の特徴ある植物群落など、貴重な植物もみられる。

壱岐の文化を育んだ島の風土を歴史文化の母体となった特徴を表す類型とする。

- H. 壱岐の文化を育んだ島の風土

④ 偉人の観点

壱岐にゆかりのある偉人は、この島の歴史や土地柄、人柄の一端を表す。またこの偉人を知ることは市民が故郷に誇りと愛着を持つ一助ともなる。この偉人に関する物事を、歴史文化の特徴を表す類型とする。

- I. 壱岐にまつわる偉人のものがたり

第5節 関連文化財群の設定

前節で抽出した歴史文化の特徴を表す類型を関連文化財群の類型とし、それぞれを構成する壱岐遺産の関連性によって細分類を設定する。

ここでは、類型ごとにストーリーを設定するが、このストーリーは今後の調査研究によってさらに深めていく必要がある。

A. 一大勢力を誇った古代壱岐

弥生時代から古代にかけて、壱岐は外国との交易・交流の中継地点として栄え、古代日本において一大勢力を誇っていた。

（一支国）

壱岐は古代中国の歴史書「魏志倭人伝」に記される「一支国」であり、原の辻遺跡は

その王都に特定されている。この大規模な遺跡から発見された数多くの遺物から、中国・朝鮮半島と日本を結ぶ交易・交流拠点であったことが判っている。

(古墳群)

壱岐に残る数多くの古墳は古代壱岐の強い勢力を示している。古墳の副葬品からは朝鮮半島の新羅との関係をうかがわせる遺物などが発見されている。この壱岐古墳群が集中する島の中央部には古代豪族「壱岐氏」の居館（現在の国片主神社）があり、この付近が壱岐の政治的中心であったと考えられている。

このストーリーについては、次の細分類を設定する。

A-1 「魏志倭人伝」に記される一支国、東アジアの交流・交易の拠点

A-2 数多い古墳群

B. 信仰とまつりの島

壱岐では古くから多くの神社を祀り、また多くの寺院を崇敬し、祭礼や行事が盛んで、さらに特徴ある民俗的な信仰も伝えられている。これらの信仰が壱岐の歴史や生活に深く根付いている。

(神社)

壱岐は『古事記』に記される国生みの神話の中で伊伎嶋（壱岐島）、別名「天比登都柱（あめのひとつばしら）」として生まれたとされている。

また、全国でも有数の神社密集地で、『延喜式』神名帳（927年）に登載された式内社は24社にのぼる。この数の多さは古代において朝廷から重要視されていたことを物語っている。残念ながら古い社殿は少ないが、特徴ある形状の多くの石鳥居が残されている。また、このほかにも島内のいたるところに神社が祭られており、地区ごとに守り伝えられてきた。祭礼も盛んで、代表的な壱岐神楽や、聖母宮で行われる舟競漕行事（ミーキブネ）は特徴的である。

(寺院)

寺院の数も多い。壱岐で最も有名な寺院は安国寺（1350年開山、1799年仏殿再建）であり、多くの宝物が伝わり、高麗版大般若経は国重要文化財に指定されている。近世には平戸藩により多くの寺院が造られ、生活と密接に結びつき、仏教に由来する年中行事や儀礼が行われている。また、仏像や工芸品、石造物、文書など多数の文化財が守り伝えられている。

(民俗信仰)

海岸に漂着した人の下半身を祀る「唐人神」や、海中に祀られる「はらほげ地蔵」など、神社や寺院に属さない民俗的な信仰が生きている。

このストーリーについては、次の細分類を設定する。

B-1 数多い式内社、神社と祭礼、石鳥居

B-2 寺院と行事、仏教美術

B-3 その他信仰にまつわるもの

C. 辺境の島であるが故の光と影

壱岐は辺境の島であることにより異国からの襲来を受け、また日本からの出兵の前線基地ともなり、近現代においても国防における海上防衛の拠点となっている。一方、辺境故に中国・朝鮮半島との交易拠点となり、また文化の架け橋であり続けている。

(異国の襲来)

古代より、壱岐は度々異国の襲来にさらされてきた。白村江の戦い（663年）後には防人がおかれ、唐からの侵攻に備えていた。

中世には二度にわたる元寇（文永の役・1274年、弘安の役・1281年）にさらされ、甚大な被害を受け、古戦場や千人塚に今もその歴史を伝えている。

(文禄・慶長の役)

中世には豊臣秀吉による文禄・慶長の役に際し、壱岐北端の勝本浦に兵站線の出城として勝本城が築かれた。この城は秀吉が没するまでおよそ7年間用いられた。現在は勝本浦を見下ろす城山に石垣などが残されている。

(中国・朝鮮半島との交易)

上記のような戦闘の歴史の一方で、壱岐は中国大陸や朝鮮半島との交易の舞台であり続けた。

白村江の戦い後、朝廷が派遣した遣新羅使は壱岐を中継地とした。その一行に雪連宅満が居り、壱岐で病没したことが万葉集に記され、同行者による悼む歌が残されている。また宅満の墓が石田町に残る。

中世には16世紀中頃、松浦党のひとり、源壱は朝鮮王朝から貿易許可証である凶書（ずしよ）を受けていた。源壱の居城であったとされる生池城跡が勝本町百合畑触に残っている。

(朝鮮との文化の架け橋)

朝鮮と日本との交流は室町時代から行われ、17世紀初頭から19世紀前半にかけて朝鮮通信使が派遣された。その際、通信使は壱岐に寄港し、勝本浦には接待を行った「朝鮮通信使迎撃所」が置かれた。その図面が『土肥家文書』として残されている。

(国防の要衝)

壱岐は古代より現在まで、国防の前線基地であり続けた。

先に述べたように、古代には壱岐にも防人が置かれ、烽（とぶひ）が14か所設けられたとされる。また近世には平戸藩が壱岐北端の勝本浦の若宮島と南端の最高峰・岳の辻に遠見番所と烽火台を設けた。若宮島はその後も海上防衛の拠点として用いられ、現在も海上自衛隊壱岐警備所が置かれている。

また、昭和初期には壱岐の黒崎と大島等に海上に向けた砲台が置かれた。戦後に大砲は解体されたが、地下施設の遺構が残る。

このストーリーについては、次の細分類を設定する。

- C-1 異国の襲来
- C-2 文禄・慶長の役
- C-3 大陸・朝鮮半島との交易
- C-4 朝鮮との文化の架け橋
- C-5 国防の要衝

D. 壱岐の政

中世戦国時代には松浦党 5 氏や波多氏の統治を巡る戦いがあり、最終的に日高氏が治めるところとなった。日高氏は平戸松浦藩に隷属し、戦国時代末には平戸松浦藩の領地となった。

松浦藩は明治維新に至るまで約 3 世紀の間、壱岐を統治し、農村のあり方や漁業、また外国貿易などに深くかかわり、壱岐の民俗にも大きな影響を与えている。

(戦国時代)

壱岐の統治について、13 世紀後半に起こった文永・弘安の役後、波多氏が壱岐を治め、やがて松浦党の 5 氏が分治し、積極的な国内外との交易を行っていた。

15 世紀後半に肥前の岸岳城主波多泰（はたやすし）が壱岐に侵攻し、松浦党 5 氏は観城の戦いで敗北し、以後、波多氏が壱岐を統一して治めた。その後、内紛や謀反を経て、16 世紀後半には波多家の重臣であった日高氏が全島を支配した。その後、日高氏は平戸の松浦氏に隷属し、以後、壱岐は松浦領となった。

波多氏・日高氏の居城は郷ノ浦の亀丘城であり、以後、郷ノ浦は壱岐の行政中心地となっている。

(松浦藩の統治)

平戸松浦藩は 16 世紀後半から明治 2 年の版籍奉還に至るまで、およそ 3 世紀にわたり壱岐を統治した。壱岐の触や在、浦の仕組みも平戸藩によるものとも考えられている。壱岐には平戸藩最大の農地があり、藩の約三分の一の石高を担っていた。また、漁業や海運業の振興を目的に、浦には他国の商人の出入りを奨励し、18 世紀に盛況を迎えた壱岐の捕鯨も藩政に大きく貢献した。藩による寺院の建立は、幕府の宗教統制の一環とする寺請制度を普及させるためとの考察もある。この近世の統治は、壱岐に伝わる在・触や浦のくらしに大きくかかわるものといえる。

このストーリーには、つぎの細分類を設定する。

D-1 壱岐の戦国時代

D-2 平戸藩による統治

E. 玄界灘に培われた海のくらし。浦のくらし

近世に栄えた壱岐の鯨組による捕鯨は、浦の成り立ちや藩政に大きく関わった。また近世に形成された港町は今も伝統的な景観を伝えている。さらに、航海安全や豊漁祈願のまつりや信仰が生活に根付き、海女・海士の伝統的な漁が続けられている。

(捕鯨)

壱岐の鯨とのかかわりは弥生時代に遡り、捕鯨の様子を描いた線刻土器が原の辻遺跡から見つかっている。壱岐の近海は日本海と東シナ海を回遊する鯨の通り道で、捕鯨に適していた。壱岐の鯨組は 17 世紀に捕獲量を伸ばし、18 世紀には最盛期を迎えた。また、捕鯨による膨大な利益は松浦藩の新田開発にも充てられた。この捕鯨もやがて、19 世紀中頃に捕獲数が激減し、明治 30 年が最後の捕鯨であった。鯨組の建物跡や鯨供養塔、漁労用具や捕鯨に関する工芸品などが残されている。

(港町)

近世において、平戸藩は分散していた漁民を8ヶ所の浦に集め、漁港や廻船の港が形成された。現在でも、伝統的な漁村の風景の名残を残し、なかでも勝本浦の景観は良好に保たれている。ブリ・イカの一本釣りや、ワカメ漁などが盛んである。

(海のまつり)

航海の安全や豊漁を祈願する行事が根付いており、なかでも船競漕行事は特徴ある祭りである。勝本浦の聖母宮の祭礼ではミーキブネと呼ばれ、現在でも行われている。また芦辺浦でも、フナグロと呼ばれる舟競漕行事が行われていた。このほか、芦辺浦の住吉神社例祭の御幸船を中心とした神事や、漁師や海士・海女に伝わる船霊信仰などが海に関するまつりとしてあげられる。

(漁撈)

壱岐では、古くから海士・海女漁が行われてきた。アワビ、サザエ、ウニなどの素潜り漁であり、八幡浦と小崎浦で盛んであった。八幡浦では現在も続けられている。

このストーリーには、つぎの細分類を設定する。

E-1 壱岐の捕鯨

E-2 壱岐の漁港

E-3 海のまつり

E-4 伝統的な漁

F. 肥沃な農地に伝わる暮らし。在・触の暮らし

壱岐の内陸はなだらかな地形であり、深江田原に代表されるように肥沃な農地に恵まれている。広大に農地に営まれる散村は在・触の景観を特徴付けている。また、農作に伴う信仰や風習が残っている。

(散村の風景)

壱岐の内陸には散村の風景が広がる。散村とは広い農地に農家が散らばって点在するもので、近世の土地割替制度によると考えられている。土地割替制度とは、壱岐全島の農地を平均に各戸に割り当て、一定の年数ごとに入れ替える制度である。多くの農家は背後に背戸山(せどんやま)と呼ばれる防風林を持ち、また屋敷の前面に畑を設けている。広い農地に背戸山を持つ農家が点在する風景は、壱岐の在・触の景観を特徴付けている。

(農家のまつり)

この壱岐の農家では、日常的に田の神様や牛の神様などを祀る風習が残っている。

このストーリーには、つぎの細分類を設定する。

F-1 散村の景観

F-2 農作のまつり

G. 豊かな島に育まれた生活文化

壱岐には生活に密接に結びついた伝統的な年中行事が伝わり、また豊かな農産物・海産物を用いた郷土料理が作られ、また独特の方言や地名が残っている。

これら言葉と食、まつりは伝統的な生活文化を濃厚に伝えている。

(年中行事)

壱岐に伝わる年中行事は、広く日本の各地で行われてきた節句に関する行事や、稲作に関することも多いが、特徴的なものとして、盆綱引とカズラ曳きがあげられる。

(郷土料理)

農産物と海産物に恵まれた壱岐では、多様で豊かな郷土料理が伝えられている。

また、年中行事と結びついたものもある。もてなし料理の「ひきとおし」や、海水を用いた壱州豆腐、麦焼酎の発祥である壱岐焼酎などが特徴あるものとしてあげられる。また、イカの天日干しの様子は港の風景をつくっている。

(方言・地名)

壱岐の方言は壱州弁ともいわれ、九州本土とは離れているため独自性がある。また壱岐の中でも農村・漁村や島の位置によって違いがある。

また、在・触や浦のように、独特の土地の呼び方がある。

このストーリーには、つぎの細分類を設定する。

G-1 今に伝わる年中行事

G-2 島に伝わる料理

G-3 今も伝わる方言・地名

H. 壱岐の文化を育んだ島の風土

壱岐のなだらかな地形や変化に富んだ海岸、豊かな照葉樹林や太古の大陸との関係がうかがわせる化石など、壱岐の歴史文化の基盤となった独特の島の風土がある。

(特徴的な地形・地質・鉱物・奇岩)

壱岐は活発な火山活動による溶岩で緩やかな丘陵地が形成された。海岸沿いには断層が表れ、貴重な地層資料となっているところもある。

また、植物化石や魚類化石からは太古の環境を知る手掛かりが得られており、1971年に発見されたステゴドン象化石とともに、日本と大陸との関係を知る貴重な資料となっている。さらに、島内には、猿岩や左京鼻、鬼の足跡などの奇岩が多くあり、特徴ある景観を成している。

(植物)

壱岐は温帯の照葉樹林が植生の基盤であるが、貴重なものとして多種の海浜植物群落がある。その他、南方系・熱帯性植物が数多く見られる。

(港、海岸の景観)

海岸の景観は断崖や砂浜など多様であり、港や海岸の地点ごとに異なる風景が見られる。このうち、景勝地は壱岐対馬国定公園や海中公園地域に指定されている。また壱岐・対馬の海にはサンゴ礁がある。

このストーリーには、つぎの細分類を設定する。

- H-1 特徴的な地形・地質・鉱物・奇岩
- H-2 壱岐島の植物
- H-3 壱岐の港と海岸の景観

I. 壱岐にまつわる偉人のものがたり

壱岐にまつわる歴史上の人物として、古くは遣新羅使の一員で、壱岐で病没した雪連宅満や、近世の俳人河合曾良の墓がある。また近現代には実業家や教育者、学者、芸術家など、多彩な偉人を輩出した。

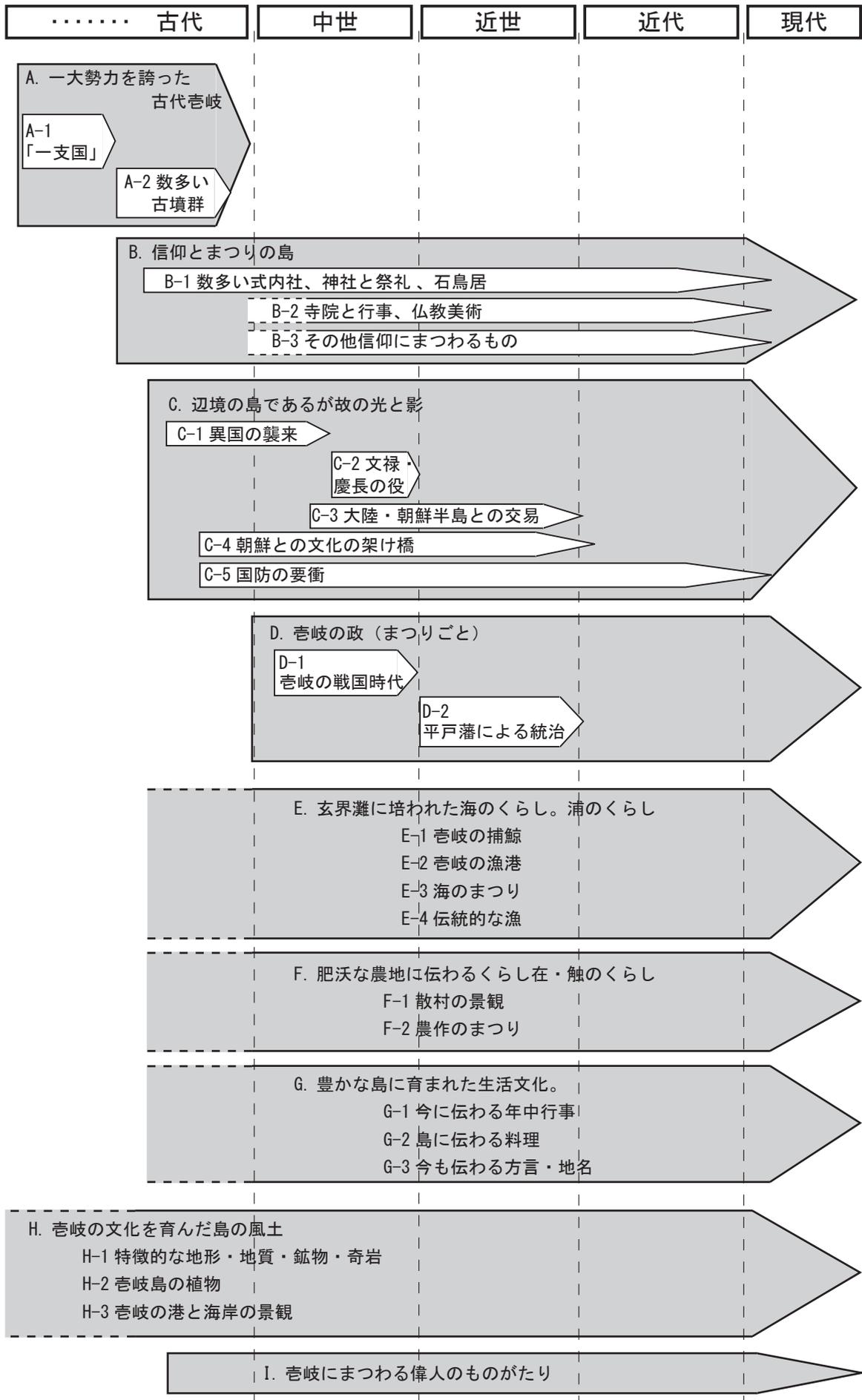
近代の朝鮮事業界や壱岐の発展に貢献した熊本利平の住宅である碧雲荘や、日本の電力王として知られる松永安左エ門の生家跡に設けられた松永記念館などに訪れることができる。

J. その他、壱岐の特徴となるもの

以上の、AからIまでに属さない壱岐遺産について、当面はその他として取り扱い、今後の調査研究の中で何れかの類型への関連付けや、新たな類型などを検討する。

以上に整理した壱岐遺産の類型と細分類は下表のとおりである。尚、それぞれの類型は相互に関連しあうものであり、複数の類型に属する遺産もある。

壱岐らしさ（歴史文化の特性）の類型	
<p>A. 一大勢力を誇った古代壱岐</p> <p>A-1 「魏志倭人伝」に記される一支国、東アジアの交流・交易の拠点</p> <p>A-2 数多い古墳群</p>	<p>島の生活文化・民俗</p> <p>壱岐の風土（海に囲まれた島）</p>
<p>B. 信仰とまつりの島</p> <p>B-1 数多い式内社、神社と祭礼、石鳥居</p> <p>B-2 寺院と行事、仏教美術</p> <p>B-3 その他信仰にまつわるもの</p>	
<p>C. 辺境の島であるが故の光と影</p> <p>C-1 異国の襲来</p> <p>C-2 文禄・慶長の役</p> <p>C-3 大陸・朝鮮半島との交易</p> <p>C-4 朝鮮との文化の架け橋</p> <p>C-5 国防の要衝</p>	
<p>D. 壱岐の政（まつりごと）</p> <p>D-1 壱岐の戦国時代</p> <p>D-2 平戸藩による統治</p>	
<p>E. 玄界灘に培われた海の暮らし。浦の暮らし</p> <p>E-1 壱岐の捕鯨</p> <p>E-2 壱岐の漁港</p> <p>E-3 海のまつり</p> <p>E-4 伝統的な漁</p>	
<p>F. 肥沃な農地に伝わる暮らし。在・触の暮らし</p> <p>F-1 散村の景観</p> <p>F-2 農作のまつり</p>	
<p>G. 豊かな島に育まれた生活文化</p> <p>G-1 今に伝わる年中行事</p> <p>G-2 島に伝わる料理</p> <p>G-3 今も伝わる方言・地名</p>	
<p>H. 壱岐の文化を育んだ島の風土</p> <p>H-1 特徴的な地形・地質・鉱物・奇岩</p> <p>H-2 壱岐島の植物</p> <p>H-3 壱岐の港と海岸の景観</p>	
<p>I. 壱岐にまつわる偉人のものがたり</p>	
<p>J. その他、壱岐の特徴となるもの</p> <p>J-1 建造物</p> <p>J-2 絵画</p> <p>J-3 工芸</p> <p>J-4 文書</p> <p>J-5 その他</p>	



関連文化財群と時期

※ A-1「一支国」は、「魏志倭人伝」に記される一支国、東アジアの交流・交易の拠点 の略

沓岐の歴史文化の特徴を物語る類型の細分類について、それぞれのストーリーを設定し、構成する沓岐遺産を整理する。尚、類型Ⅰには小分類は設定していない。また、類型Ⅱ（その他）にはストーリーを設定しない。

A. 一大勢力を誇った古代沓岐

A-1「魏志倭人伝」に記される一支国、東アジアの交流・交易の拠点

弥生時代には、「魏志倭人伝」に一支国に関する記述があり、原の辻遺跡がその王都であったことが明らかになっている。この頃より、沓岐は重要な交易の中継地であった。原の辻遺跡は台地を環濠で囲む大規模集落遺跡であり、数多くの建物跡や船着き場跡などの遺構とともに、同時代の朝鮮半島からの渡来品など、重要な遺物が数多く発見されている。この王都への水運路は内海湾から遺跡の北を流れる幡鉾川を遡上するルートが想定されている。また、島内にはカラカミ遺跡や車出遺跡をはじめとする同時代の大規模遺跡が発見されている。

関連する沓岐遺産

遺跡：原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡、大久保遺跡

考古資料：原の辻遺跡出土品、車出遺跡出土品、石斧・石剣、斜行櫛歯文帯内行花文鏡、壺形土器、中広銅銚

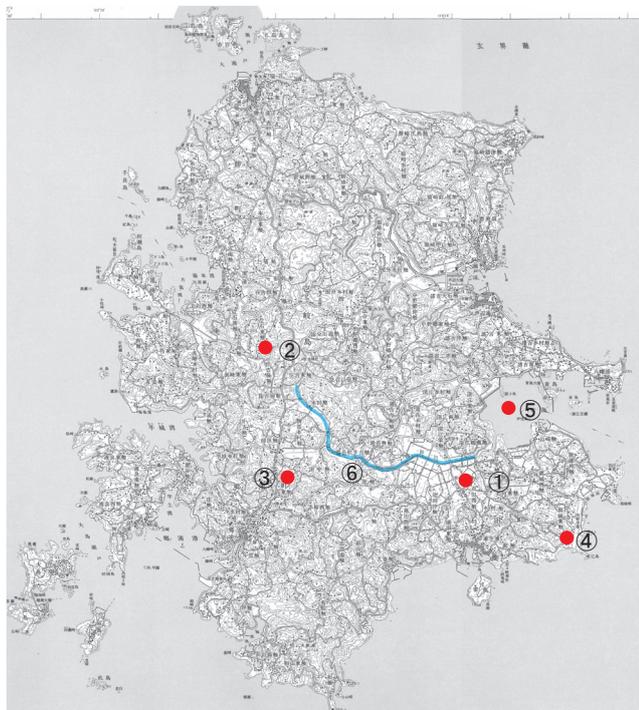
その他：内海湾、幡鉾川



原の辻遺跡



カラカミ遺跡



- ①原の辻遺跡
- ②カラカミ遺跡
- ③車出遺跡
- ④大久保遺跡
- ⑤内海湾
- ⑥幡鉾川

関連する沓岐遺産の分布図（A-1「魏志倭人伝」に記される一支国、東アジアの交流・交易の拠点）

A-2 数多い古墳群

壱岐には 280 基の古墳が確認されており、長崎県全体の 6 割を占める。確認された中で最古のものは 5 世紀後半（古墳時代中期）に築造された大塚山古墳（芦辺町）であるが、大半は 6 世紀後半から 7 世紀前半（古墳時代後期から終末期）にかけて造られた。その分布は島のほぼ中央に集中し、古代豪族「壱岐氏」の居館（現在の国片主神社）周囲が壱岐の政治的中心であったと考えられている。長崎県最大の前方後円墳である双六古墳をはじめ、対馬塚古墳、掛木古墳、笹塚古墳、兵瀬古墳、鬼の窟古墳などの巨石古墳があり、また百合畑古墳群や百田頭古墳群などの群集墳が築造されている。6 世紀後半からは、島内各地に装飾古墳が造られるようになり、捕鯨の様子を線刻で描いた鬼屋窟古墳や大米古墳などもみられる。

これら古墳の副葬品の中には中国大陸や朝鮮半島からの渡来品も多く含まれており、壱岐が独自の交流によって新羅をはじめとする異国との友好的な関係を築いていたことがうかがえる。このことから、敵対する倭国と新羅の間であって、両者の関係を取り持つ重要な役割を担っていたと考えられている。

関連する壱岐遺産

古墳：壱岐古墳群（双六古墳、対馬塚古墳、掛木古墳、笹塚古墳、兵瀬古墳、鬼の窟古墳）、大塚山古墳、松尾古墳、真部路 1 号古墳、鬼屋窟古墳、大原天神の森 1 号墳・2 号墳、平山古墳、大米古墳、永田 12 号墳

考古資料：笹塚古墳出土品、双六古墳出土品、中広銅銚、四乳輻状帯鏡、掛木古墳（家形石棺）、須恵器台付直口壺



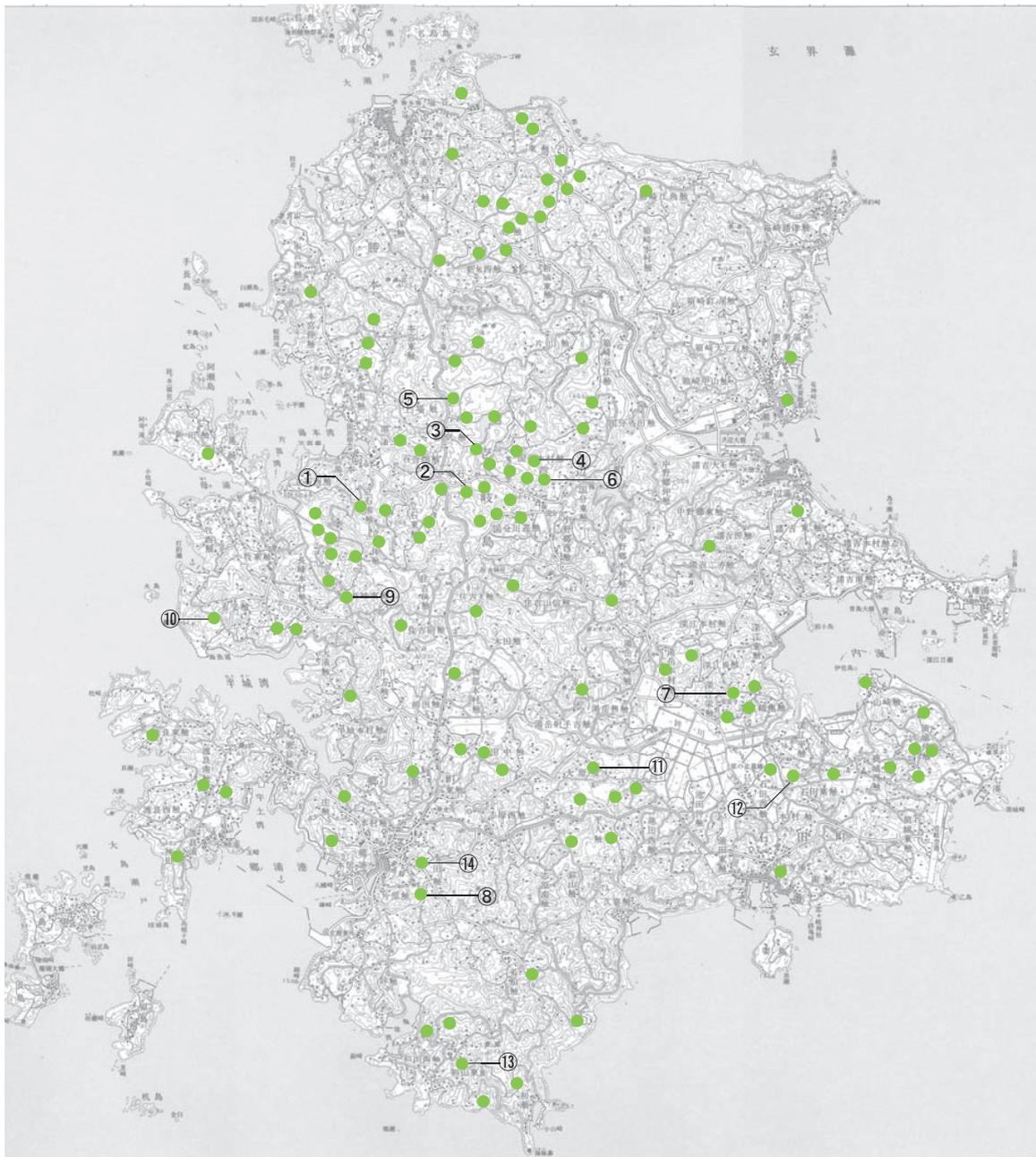
掛木古墳



鬼の窟古墳



双六古墳出土品



- ①対馬塚古墳
- ②双六古墳
- ③笹塚古墳
- ④兵瀬古墳
- ⑤掛木古墳
- ⑥鬼の窟古墳
- ⑦大塚山古墳
- ⑧松尾古墳
- ⑨真部呂 1 号墳
- ⑩鬼屋窪古墳
- ⑪大原天神の森 1 号墳・2 号墳
- ⑫平山古墳
- ⑬大米古墳
- ⑭永田 12 号墳

関連する吉岐遺産の分布図 (A-2 数多い古墳群)

B. 信仰とまつりの島

B-1 数多い式内社、神社と祭礼、石鳥居

日本最古の歴史書『古事記』（712年）に記される国産みの神話の中で、イザナギ・イザナミの2神が大八島を生む。その5番目に生まれたのが伊伎嶋（壱岐島）であり、別名、天比登都柱（あめのひとつばしら）と呼ばれている。このように、神話と結びつく島であった。

壱岐は全国でも有数の神社密集地で、『延喜式』（927年）に朝廷から官社として認められた神社を記す神名帳に記載された式内社は24社にのぼる。その後、焼失や損害を受けながらも現在に受け継がれ、明神大社6、大社1、小社17が比定されている。明神大社には当時の中央（京都）に分霊された月読神社（芦辺町）や、住吉神社、兵主神社、中津神社、天手長男神社、天手長比賣神社がある。またこれらを含め、現在、法人登録された数だけでも150を超える神社が島のいたるところに点在している。また氏神様を祀る神社が42社あり、地区ごとに守り伝えられてきた。古い社殿は少ないが、笠木の端部が大きく反り上がる特徴ある石鳥居や石燈籠等の石造物が歴史を伝えている。

これら神社の代表的な祭礼に壱岐神楽がある。これは島内各地区の祭礼の際に執り行なわれるもので、歌舞は神職のみで行われる神聖なものである。また、聖母宮（勝本町）は式内社の論社であるが、盛大な祭礼が行われ、中でも御幸船（ミーキブネ・選択無形文化財）をはじめとする海の漁に関連するまつりに特徴がある。

関連する壱岐遺産

建造物：聖母宮（本殿・西門・南門）

神社：爾自神社の東風石と石灯籠、熊野神社石鳥居、聖母宮石鳥居、中津神社石鳥居、若宮神社石鳥居、聖母宮石燈籠（1644）、聖母宮石燈籠（1647）、牧之神社の石祠、男岳神社石猿群、無格社見上神社、村社大国玉神社、村社国津意加美神社、村社国津神社、村社津神社、村社天手長男神社、村社爾自神社、村社弥佐支刀神社、無格社物部布都神社跡、村社天手長比売神社跡、その他式内社

絵画：絹本着色高野四社明神像

彫刻：木造宝冠釈迦如来坐像

工芸：双龍文鏡、住吉神社神鏡17面、御幸船、神獄三所権現宮棟札（1635・1804・1807・1807）、白沙八幡神社三十六歌仙画、神楽面（2面）、神楽面猿田彦

民俗：壱岐神楽、壱岐の船競漕行事（聖母宮のミーキブネ）

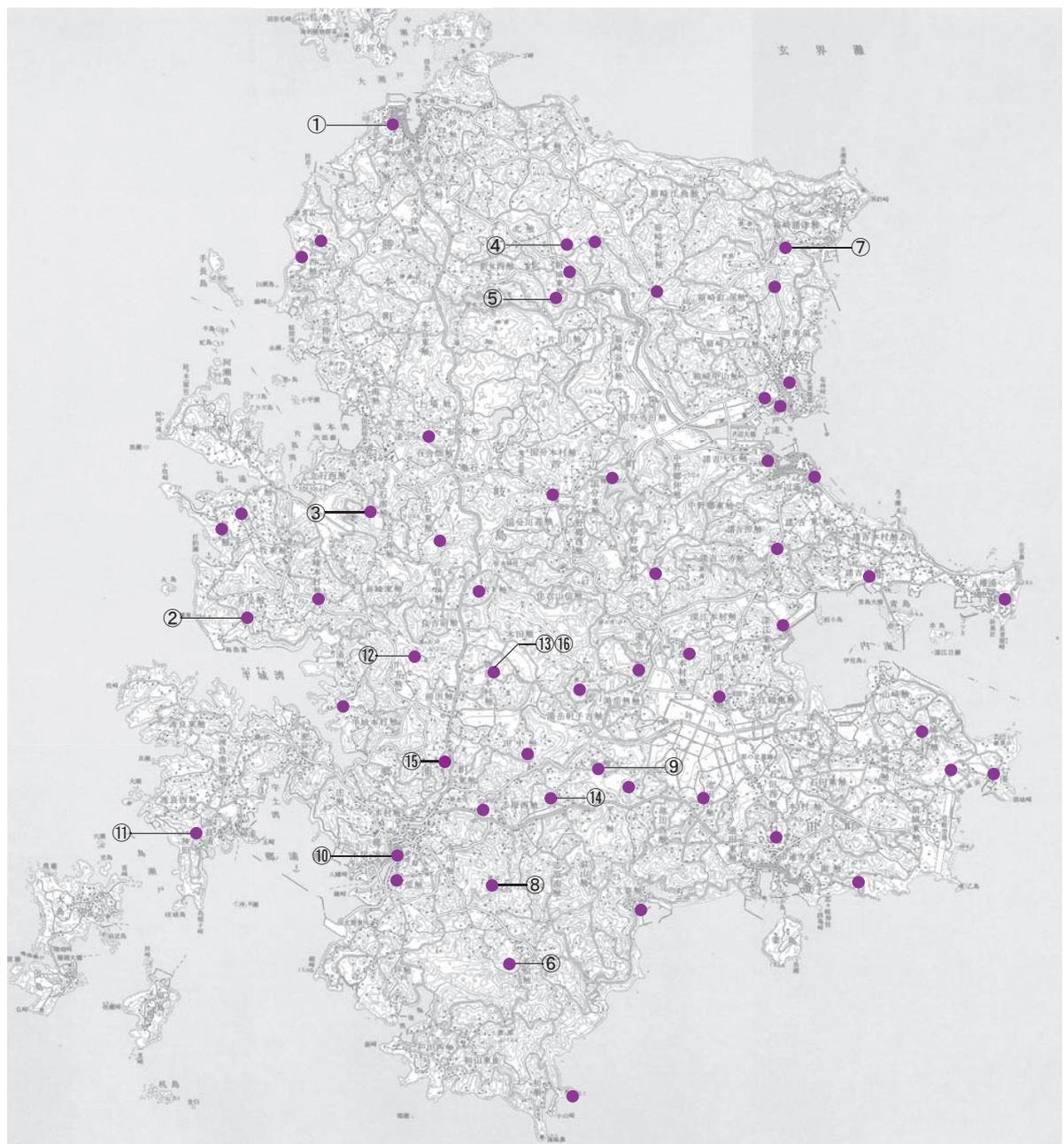
その他：氏神様



月読神社



壱岐神楽



- ① 聖母宮（本殿・鳥居・燈籠）
- ② 爾自神社（本殿・東風石・石灯籠）
- ③ 熊野神社石鳥居
- ④ 中津神社石鳥居
- ⑤ 若宮神社石鳥居
- ⑥ 牧之神社の石祠
- ⑦ 男岳神社石猿群
- ⑧ 無格社見上神社
- ⑨ 村社大國玉神社
- ⑩ 村社國津意加美神社
- ⑪ 村社國津神社
- ⑫ 村社津神社
- ⑬ 村社天手長男神社
- ⑭ 村社弥佐支刀神社
- ⑮ 無格社物部布都神社跡
- ⑯ 村社天手長比売神社跡
- ⑰ 老岐神楽
- ⑱ 御幸船

式内社 24 社

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| (1) 住吉神社 | (15) 國津神社 |
| (2) 月読神社 | (16) 中津神社 |
| (3) 國片主神社 | (17) 手長比賣神社 |
| (4) 興神社 | (18) 阿多彌神社 |
| (5) 高御祖神社 | (19) 水神社 |
| (6) 兵主神社 | (20) 海神社 |
| (7) 佐肆布都神社 | (21) 角上神社 |
| (8) 天手長男神社 | (22) 天手長比賣神社
(天手長男神社に合祀) |
| (9) 爾自神社 | (23) 佐肆布都神社
(中津神社に合祀) |
| (10) 津神社 | (24) 物部布津神社
(天手長男神社に合祀) |
| (11) 大國玉神社 | |
| (12) 彌佐支刀神社 | |
| (13) 國津意加美神社 | |
| (14) 見上神社 | |

関連する老岐遺産の分布図（B-1 数多い式内社、神社と祭礼）

B-2 寺院と行事、仏教美術

壱岐には現在、全日本仏教会加盟の寺院が 33 寺あり数が多い。

天平時代、聖武天皇の詔により全国に国分寺・国分尼寺が造られたが、壱岐では嶋分寺として豪族・壱岐直（いきのあた）の氏寺を転用したとされ、現在では壱岐国分寺跡として長崎県史跡に指定されている（発掘調査によると氏寺期が 8 世紀中から後半、嶋分寺創建期が 8 世紀後半から末頃）。この一帯は壱岐氏の居館跡と推定される国片主神社や壱岐古墳群があり、当時の壱岐の中心地であったと考えられている。現在の国分寺は 18 世紀に平戸藩主松浦氏により再興されたものとされている。

安国寺（芦辺町）は、室町時代の足利尊氏・直義による平和祈願と元弘の変以来の戦死者の弔いを目的とした全国の安国寺造営によるものである。壱岐の安国寺の開山は 1350（観応元）年で、仏殿は 1799（安永 8）年の再建である。臨済宗の寺院で高麗版大般若経は国の重要文化財に指定されている。

江戸時代には、平戸藩により島内に多くの寺院が造られた。これは同藩が海外貿易の拠点であったことから、幕府の宗教統制の一環である寺請制度に基づき、壱岐に多くの寺院を設けたためとの考察もある。

これら寺院は生活と密接に結びつき、仏教に由来する年中行事や儀礼が行われているほか、仏像や工芸品、石造物など多くの文化財が守り伝えられている。

関連する壱岐遺産

遺跡：壱岐国分寺跡、壱岐国安国寺跡

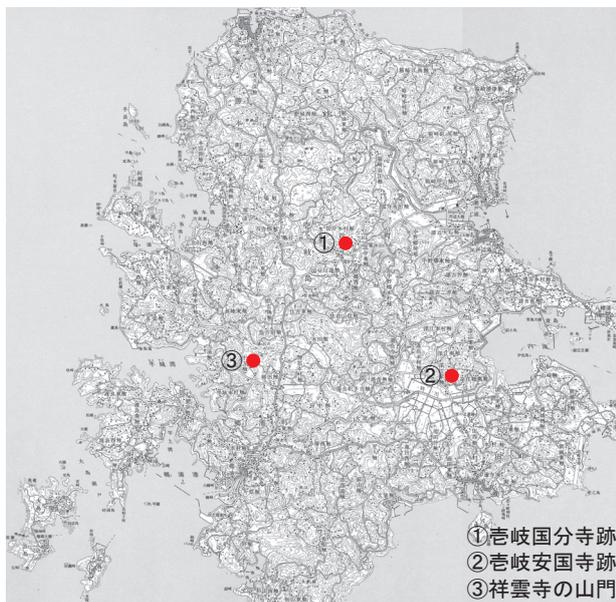
建造物：祥雲寺の山門

石造物：五輪塔群（13 基）、宝篋印塔、宝篋印形供養塔、宝塔、狛犬

彫刻：木造不動三尊像（3 軀）、銅造如来形坐像、銅造菩薩形坐像、銅造如来形坐像、木造阿弥陀如来立像、田中触薬師堂の木造薬師如来坐像、法輪寺の銅造如来坐像、南明寺の銅造如来坐像、専念寺の銅造如来立像、浮彫仏頭、銅造誕生釈迦仏立像、銅造誕生釈迦仏立像、銅造如来型立像、銅造如来型立像、木造阿弥陀三尊像、木造地藏菩薩坐像、木造地藏菩薩半跏趺坐像、木造十一面観世音菩薩坐像、木造十一面観世音菩薩坐像、木造如来形坐像、木造如来形坐像及胎内仏、木造薬師如来坐像、木造弥勒菩薩坐像、銅造懸仏尊像

工芸：安国寺什物 10 点、飴釉三耳壺（聖母宮茶壺）、金蔵寺の鰐口、金蔵寺の梵鐘、定光寺の雲版、羅漢像・半托迦尊者、銅造梵鐘、銅造梵鐘、銅造雲版、銅造鰐口、三十六歌仙絵馬（34 面）、標的絵馬、武者絵馬、袈裟

文書等：（安国寺の）高麗版大般若経、五部大乘経（197 卷）、西福寺の大般若経、金蔵寺文書、黄檗版大般若経



関連する壱岐遺産の分布図（B-2 寺院と行事、仏教美術）

B-3 その他信仰にまつわるもの

壱岐には神社や寺院に属さない民俗的な信仰が生きている。例えば異国から漂着した遺体をすべて「神」として捉えた信仰があり、石田町印通寺浦には中世に漂着した下半身を祀った「唐人神」がある。また、海女で知られる芦辺町八幡浦には海中に祀られる「はらほげ地蔵」がある。満潮になると水没する6体の地蔵尊で、腹部に抉った穴があることが名称の由来であり、供物が流されないためのものと伝えられている。

その他、壱岐が名称の発祥と云われる春一番による遭難者の慰霊碑「春一番の供養塔」(郷ノ浦町)や、天然痘を除ける「疱瘡神祠」(石田町)、数多くの地蔵尊を祀る若松六地蔵(郷ノ浦町)など、民間信仰の証となるものが多く伝えられている。

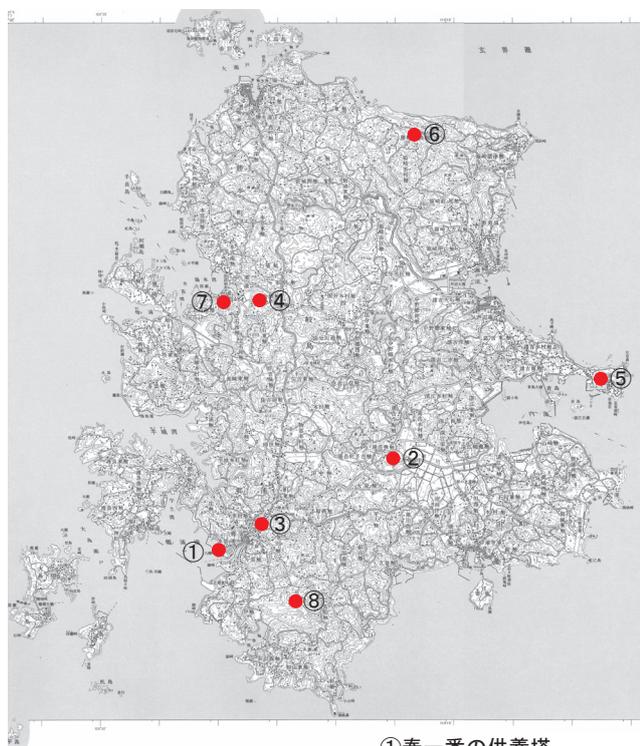
関連する壱岐遺産

石造物：春一番の供養塔、疱瘡神祠、小左衛門地蔵、石面地蔵像、はらほげ地蔵、江角荒人大明神石像、山本家の納戸神、蛇神、若松六地蔵

工芸品：銅造夜巡牌、御幸船



はらほげ地蔵



- ①春一番の供養塔
- ②疱瘡神祠
- ③小左衛門地蔵
- ④石面地蔵像
- ⑤はらほげ地蔵
- ⑥江角荒人大明神石像
- ⑦蛇神
- ⑧若松六地蔵

関連する壱岐遺産の分布図 (B-3 その他信仰にまつわるもの)

C. 辺境の島であるが故の光と影

C-1 異国の襲来

壱岐は古代より異国の襲来を受けて来た。古くは7世紀に烽火や防人を置き、外敵に備えている。11世紀には刀伊の入寇（寛仁3・1019年）として知られる襲撃を受け、多数の島民が被害を受けている。これは女真族の襲来で、壱岐・対馬を襲い、筑前まで侵攻した。

13世紀には二度にわたる元寇にさらされ、甚大な被害を被った。文永の役（1274年）では対馬に次いで元軍が壱岐島に上陸し、交戦の末に壱岐守護代・平景隆は樋詰城で自害する。この戦で1000人以上が没したと伝えられる。弘安の役（1281年）では壱岐守護代・少弐資時は祖父・資能、父・経資らと日本軍を率いて元軍と海上で戦うが、壱岐島沖の海上で戦死する。19歳の若さであった。

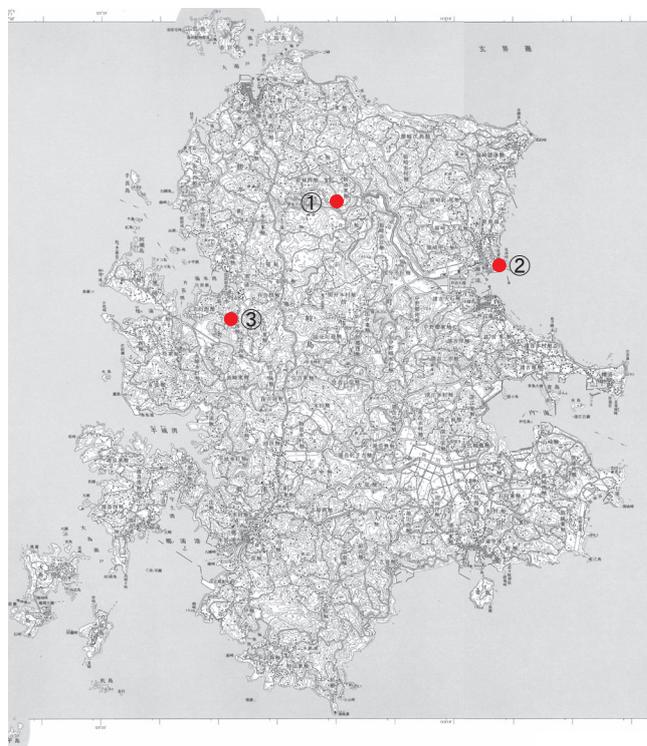
文永の役の遺跡としては新城古戦場（勝本町）や千人塚（勝本町）、また弘安の役の遺跡として瀬戸浦古戦場（芦辺町）が伝えられる。

関連する壱岐遺産

遺跡：文永の役新城古戦場、弘安の役瀬戸浦古戦場

石造物：藤原理忠の墓

その他：文永の役千人塚、少弐資時像、少弐公園



- ①文永の役新城古戦場
- ②弘安の役瀬戸浦古戦場
- ③藤原理忠の墓



文永の役新城古戦場



弘安の役瀬戸浦古戦場（壱岐神社）

関連する壱岐遺産の分布図（C-1 異国の襲来）

C-2 文禄・慶長の役

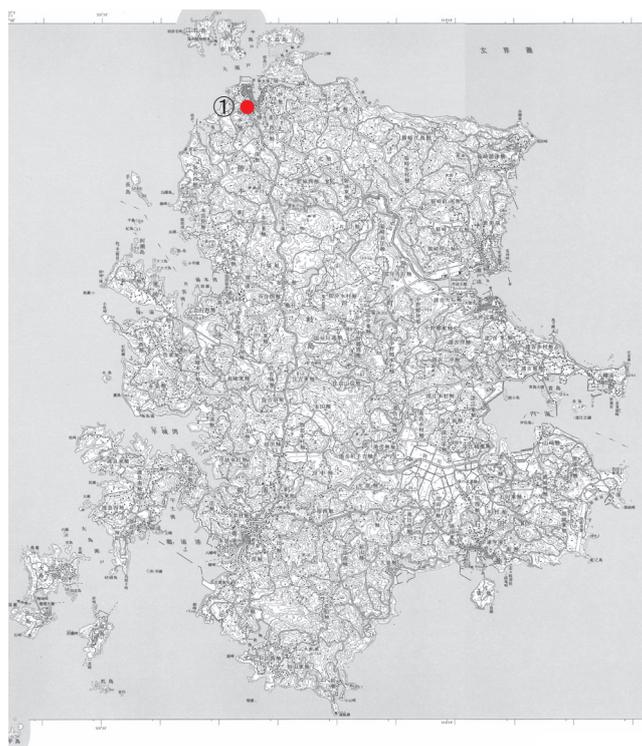
豊臣秀吉による文禄・慶長の役に際し、壱岐島の領主・松浦鎮信により兵站線の出城のひとつとして風本（勝本）に勝本城が築かれた。この築城では肥前大名有馬晴信、大村善前、五島純玄の補佐を受け、およそ4か月で1591（天正19）年に完成したと伝えられる。その後、秀吉の実弟大和大納言秀長の家臣・本田正武が手勢500人とともに城番として駐屯し、秀吉が没する1598（慶長3）年まで用いられた。現在は勝本浦を見下ろす城山に石垣などが良好な状態で残されている。

関連する壱岐遺産

城跡：勝本城



勝本城



①勝本城

関連する壱岐遺産の分布図（C-2 文禄・慶長の役）

C-3 大陸・朝鮮半島との交易

壱岐は中世も中国大陸や朝鮮半島との交易の舞台であり続けていた。16世紀中頃、倭寇であった松浦党のひとり源壱は、朝鮮王朝から貿易許可書である図書(ずしょ)を受け、正式な貿易を行っていた。勝本町百合畑触に源壱の居城であったとされる生池城跡が残る。また中国明時代(15世紀)の糸印(個人蔵)が伝えられている。糸印は明から輸入した生糸一斤に1個ずつ受領書に添付され、押印後は日本に残されたものである。現在の所有者はこれを仏像として崇拝している。

関連する壱岐遺産

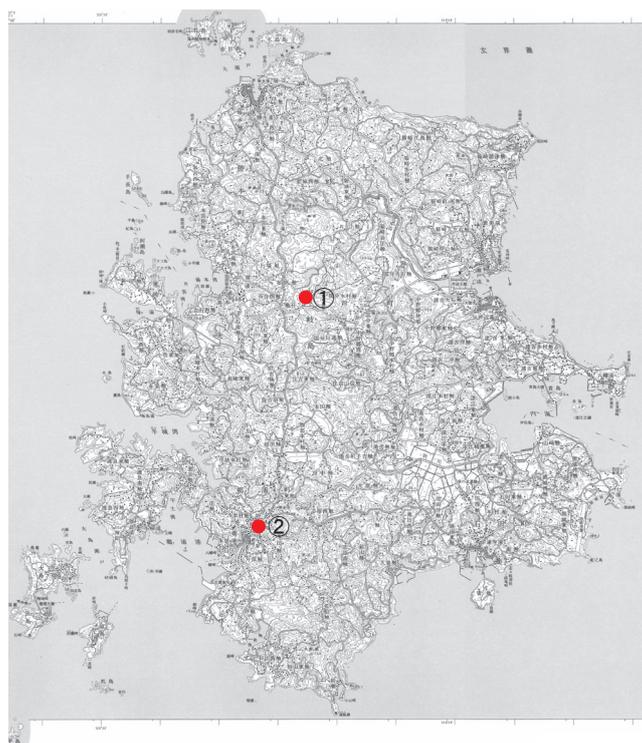
遺跡：生池城

工芸品：糸印(印文「莫」)、中国系古銭(4,165枚)と壺

石造物：小左衛門地藏



生池城



①生池城址
②小左衛門地藏

関連する壱岐遺産の分布図 (C-3 大陸・朝鮮半島との交易)

C-4 朝鮮との文化の架け橋

白村江の戦いの後、668（天智天皇7）年以降の統一新羅に対して朝廷から親善を目的とした遣新羅使が派遣された。壱岐はその中継地であり、736（天平8）年の阿部朝臣継麻呂を大使とする一行に雪連宅満がいた。宅満は代々朝廷の卜部であり、その祖先は壱岐出身であったが、この島で病没したことが万葉集に記されており、宅満の歌と同行者による悼む歌が残されている。また宅満の墓が石田町の印通寺港近くの丘にある。

室町時代からは朝鮮との交易が行われ、文禄・慶長の役後断絶していたが、江戸時代に再興され、1607（慶長12）年から1811（文化8）年までに朝鮮通信使を12回迎えた。平戸藩は朝鮮通信使の接待役を幕府より命じられ、その接待所を勝本に決め、諸行事を行った。この接待には莫大な経費がかかっていた。勝本港には往路11回、復路8回入港し、寄宿している。朝鮮通信使迎接受所神皇寺跡は、通信使一行が宿泊した場所とされている。土肥家文書の一史料「朝鮮通信使迎接受所絵図」には約2500坪の大規模な客館の平面図が描かれている。

関連する壱岐遺産

遺跡：朝鮮通信使迎接受所神皇寺跡

石造物：遣新羅使・雪連宅満の墓

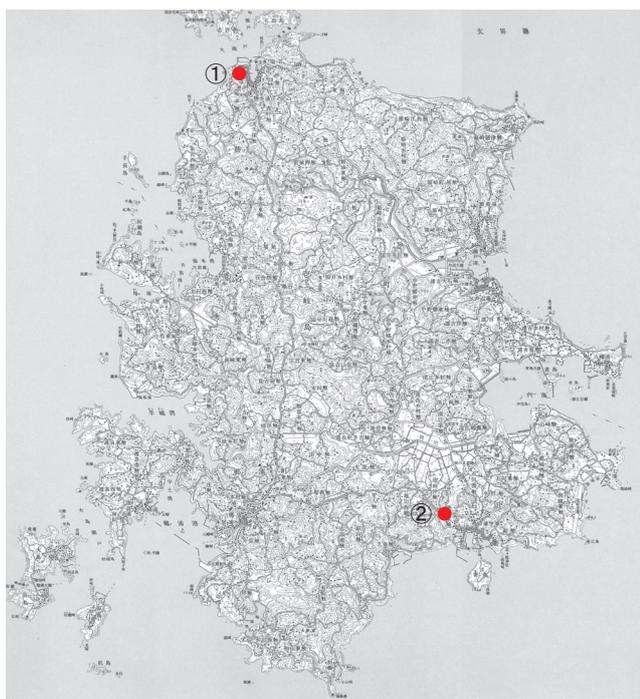
文書等：土肥家文書「朝鮮通信使迎接受所絵図」



朝鮮通信使迎接受所神皇寺跡



遣新羅使・雪連宅満の墓



①朝鮮通信使迎接受所神皇寺跡
②遣新羅使・雪連宅満の墓

関連する壱岐遺産の分布図（C-4 朝鮮との文化の架け橋）

C-5 国防の要衝

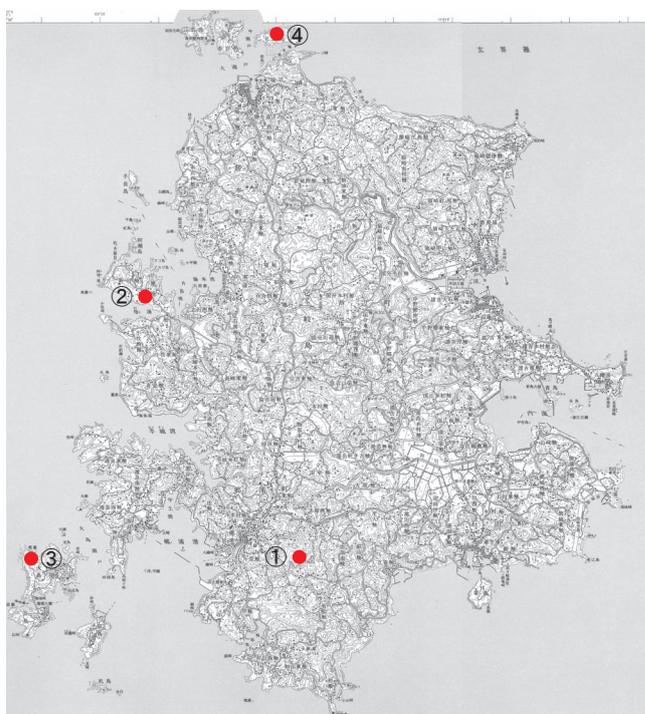
壱岐は辺境の島故に国防の前線基地でもあった。古代、大和朝廷時代には白村江の戦い（663・天智天皇2年）の敗戦の翌年に、壱岐にも防人を置き、烽（とぶひ）が設けられた。烽は壱岐に14か所設けられ、その一つは壱岐島最高峰、岳の辻（郷ノ浦町）とされる。また、1641（寛永18）年には平戸藩がこの岳の辻と北端にあたる勝本の若宮島に遠見番所と烽火台を設けた。1849（嘉永2）年には遠見番をしていた土肥甚右衛門が異国船の出現を城代に報告した記録が残る。以来、若宮島は海上交通・防衛の要衝となり、1936（昭和11）年に壱岐要塞の施設として若宮島砲台が計画され、1963（昭和31）年には海上自衛隊壱岐警備所が設置され、九州本土と対馬・五島列島を結ぶ通信拠点になっている。また岳の辻に設置された石製の緯度測定標は日本最古級のものである。

現在残る砲台跡は郷ノ浦町の黒崎と大島にその遺構を留める。大正の中頃、日本はワシントン海軍軍縮条約の結果主要な戦艦の廃艦を迫られ、これらの主砲を海上防衛の要衝となる陸上に築くこととなった。黒崎には戦艦「土佐」の主砲二門を据え、付帯の観測所・弾薬庫等を設け、1932（昭和8）年に試験・訓練射撃が行われた。戦後、1945（昭和20）年には米軍の指令により撤去解体されたが、地下施設の遺構が現在に残る。また大島にも砲台跡や見張所が残っている。

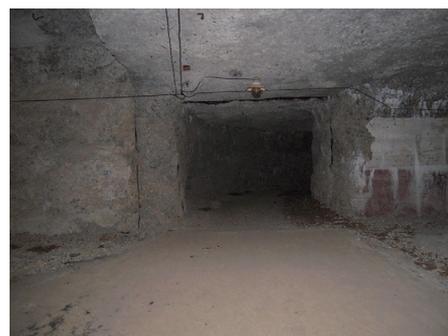
関連する壱岐遺産

岳ノ辻緯度測定標

その他：黒崎砲台跡、大島砲台跡、
名島砲台跡



- ① 岳ノ辻緯度測定標
- ② 黒崎砲台跡
- ③ 大島砲台跡
- ④ 名島砲台跡



黒崎砲台跡

関連する壱岐遺産の分布図（C-5 国防の要衝）

D. 壱岐の政（まつりごと）

D-1 壱岐の戦国時代

正平24年（1369）頃、壱岐は松浦党の志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留5氏によって分治されていた。文明4年（1472）に肥前上松浦岸岳城主波多泰が壱岐に襲来し、松浦党5氏は観城の戦いで敗れ、以後、波多氏が壱岐を統一して治めた。

天文11年（1542）に14代岸岳城主波多盛が没すると、跡目を巡り波多家に内紛が起きる。天文12年（1543）の壱岐城代は波多源五郎隆で、城代の下に六人衆を置き、それぞれ村を治めさせていたが、六人衆が反乱を起こし、弘治元年（1555）に波多隆を殺害、翌2年には隆の弟・波多源七郎重が殺害された。

また岸岳城波多家では、重臣日高甲斐守喜が謀反を起こし、岸岳城と壱岐を横領した。永禄8年（1565）に日高喜は波多壱岐守政と壱岐へ渡り、六人衆に攻め入り殺害し、波多政を壱岐城代とした。しかし、日高氏は永禄12年（1569）には岸岳城で波多氏の報復を受け、壱岐に逃亡、壱岐城代波多政を滅ぼし、元亀元年（1570）に壱岐の守護として壱岐全島を支配した。

元亀2年（1571）に日高氏が平戸の松浦氏に隷属し、一方で波多氏は対馬宗氏を頼り、抗争が続いていた。宗氏は壱岐の立石図書に内応を持ちかけるが欺かれ、浦海合戦は松浦氏の勝利に終わり、以後壱岐は松浦領となった。

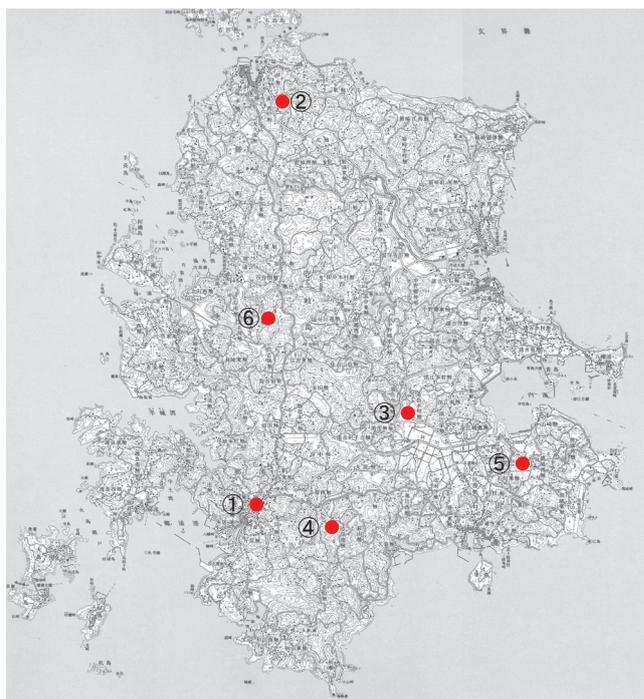
波多氏・日高氏の居城となった亀丘城跡や、波多源七郎重を祀った重山塚、浦海合戦の中心人物である立石図書の墓などが残されている。

関連する壱岐遺産

城跡：亀丘城跡、高津城址、観城跡、帯田城跡

遺跡：重山塚、

石造物：立石図書の墓、



亀丘城跡

- ① 亀丘城跡
- ② 高津城址
- ③ 観城跡
- ④ 帯田城跡
- ⑤ 重山塚
- ⑥ 立石図書の墓

関連する壱岐遺産の分布図（D-1 壱岐の戦国時代）

D-2 平戸藩による統治

元龜2年（1571）に松浦隆信が壱岐を領有してから明治2年（1869）に版籍奉還するまでの298年間、壱岐は3世紀にわたり平戸藩松浦氏の支配下に置かれた。

寛永18年（1641）、幕府の鎖国政策により、平戸にあったオランダ商館の閉鎖を命じられ、平戸藩は外国貿易による財源を絶たれ財政に深刻な影響を受ける。

藩は農業対策として、農民の確保や農耕地開墾、農業用溜池の築造、養蚕や紙漉き技術の導入による多角的農業の振興などを図った。壱岐には平戸藩最大の肥沃な耕作地があったことから、藩の約1/3の石高を背負っていた。

浦には、他国の商人が多く出入りすることを推奨し、漁業や海運業の振興を図った。18世紀に盛況を迎えた鯨組による捕鯨に課された運上金は、島内の開墾事業に充てられるなど、藩の財政を担っていた。

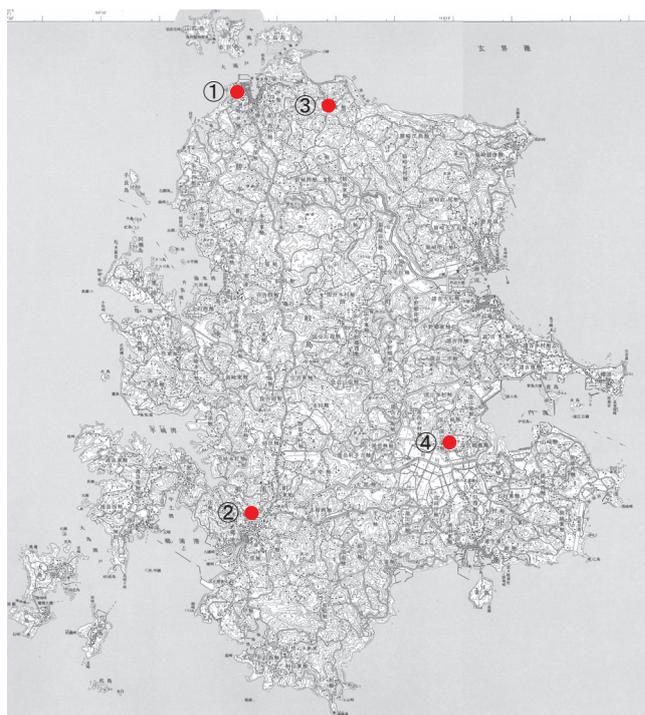
様々な振興を図り改革を行うも藩財政は徐々に悪化した。自然災害による農村の荒廃、漁民の被害も続出し、このため、年貢の取り立ては年々厳しくなった。この様な状況から可須村の百姓源三が、11代将軍徳川家斉に藩の不正を直訴して捉えられ、壱岐の百間馬場において処刑されるという事件も起こった。

この間の平戸藩による治政は、壱岐の農村・漁村の暮らしに様々な影響を与え、今日まで続く壱岐の民俗にも大きな影響を与えているとも考えられる。

関連する壱岐遺産

史跡：勝本押役所址

石造物：松浦隆信（宗陽公）の拝塔、義人・源三の墓、第2代平戸藩藩主松浦久信と久信夫人のメンシア松東院の拝塔



勝本押役所址

- ①勝本押役所址
- ②松浦隆信の拝塔
- ③義人・源三の墓
- ④松浦久信と妻の拝塔

関連する壱岐遺産の分布図（D-2 平戸藩による統治）

E. 玄界灘に培われた海のくらし。浦のくらし

E-1 壱岐の捕鯨

壱岐の島の人々と鯨との関係を示す最も古い史料に、捕鯨の様子を描いたとされる弥生時代の線刻土器が原の辻遺跡から出土しており、島の人々は古くから捕鯨を行っていたことが窺える。

壱岐島における鯨組は、明応（1492-1501）の頃に夷浦（恵比須浦）で紀州熊野漁人日高吉弥らによって突組が開始された。寛文2年（1662）には、夷浦を根拠地として8人共同鯨組が起こった。

捕鯨場は、壱岐の前海（前目）浦（恵比須浦）、勝本浦（田ノ浦）、印通寺、棚江であり、勝本浦や恵比須浦は、日本海・東シナ海の間を回遊する鯨の通り道で冬は下り鯨、春は上り鯨が沖合を通過するため、捕鯨には最適の場所であった。

延宝5年（1677）に勝本浦で大村藩の深沢伊太夫・儀太夫組が網組による捕鯨を開始し、突組に比べ捕獲数が増加した。この漁法は計40艘の船と570人の加子を要し、網や銚、剣などの漁労具も多量に必要で鯨を加工する納屋では約1000人が働くなど、膨大な資本を必要としたが、利益も大きく、「鯨1頭で7浦潤う」と言われた。

平戸藩はこの利益に注目し、4代藩主松浦鎮信が延宝9年（1681）に『鯨突御仕置』を制定、鯨1本につき銀子15枚以上の運上金が課され、勘定奉行の下に壱州鯨組方目附が置かれていた。捕鯨による膨大な利益は藩の新田開発に投じられた。

享保年間（1716～1736）に最盛期を迎え、中でも勝本浦の土肥鯨組は四代土肥市兵衛秀周の時代、明和から安永の頃に年間40頭前後を捕鯨し成功を収めた。

弘化年間（1844～1848）頃から捕鯨数が急激に減少し、その後、明治30年頃の郷ノ浦の今西音四郎組が最後の鯨組となった。

関連する壱岐遺産

遺跡：田ノ浦納屋場跡、土肥家御茶屋敷跡

石造物：鯨供養塔、深沢義太夫追善碑、石舟、土肥家墓地、はらほげ地蔵、

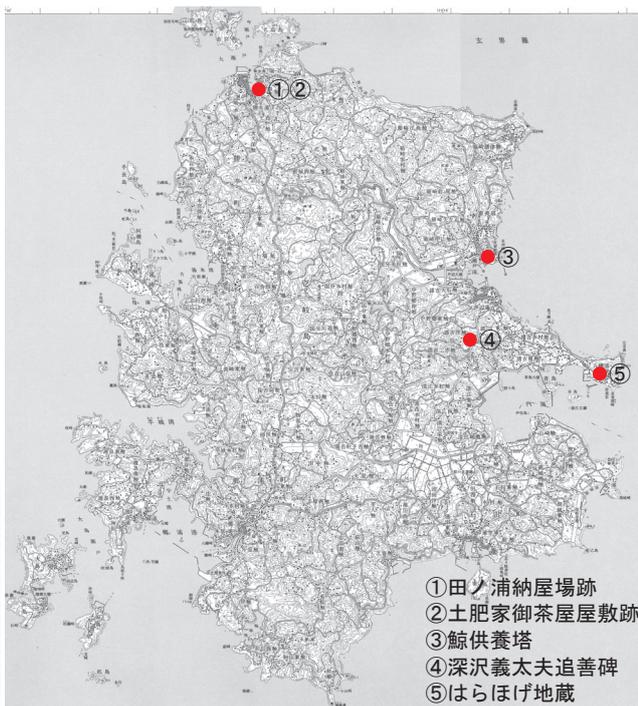
漁労用具：鯨切包丁、捕鯨の道具一式

工芸品：埴雲筆「鯨図」、土肥家位牌、西八幡神社の鯨船形絵馬、倉光勝本組奉納絵馬、墓股

民俗：ハザシ唄



田ノ浦納屋場跡



関連する壱岐遺産の分布図（E-1 捕鯨）

E-2 壱岐の漁港

壱岐は浦と触（在）に分かれ、それぞれ漁業と農業に従事し、生活・文化・風習が大きく異なる。これは平戸藩の民政によるものと考えられる。

平戸藩は、島内各地に分散していた漁民を郷ノ浦、渡良浦、湯ノ本浦、勝本浦、瀬戸浦、芦辺浦、八幡浦、印通寺浦の8ヶ所に集めた。郷ノ浦には浦役所が置かれ、勝本浦、瀬戸浦、芦辺浦は漁業で、印通寺浦は廻船業により栄えた。

現在でも、勝本浦、瀬戸浦、芦辺浦、八幡浦、山崎浦、君ヶ浦、郷ノ浦元居にはかつての漁村の風景が残るが、中でも勝本は浦の景観が良好に保たれている。

勝本浦：『壱岐国続風土記』によれば「東は聖母大明神の御旅所、西は聖母宮」であった。漁業専門の浦で、近世には土肥鯨組に代表される捕鯨により、また大正期に動力船が導入されると勝本浦近海でのブリ一本釣り漁により、栄えた浦であるといえる。

勝本浦の構成：勝本浦は、東から本浦区、黒瀬区、正村区の3区からなる。

本浦区は、近世に鯨組の捕鯨基地のあった塩屋町や、宝暦5年（1755）に朝鮮通信使送迎地として埋め立てられた築出町など、8町からなる。網漁やタイ釣りを行う純漁業者が多い。黒瀬区は東端から西端まで、中央道路の両側に商店が連なり、漁業世帯は少ない。昭和49年までは、琴平町の棧橋に博多と対馬を結ぶ定期船が入港していた。正村区は海岸沿いに建つ住居の裏が急な崖になっているため新たな宅地開発が行われず古くからの住民が多い。また専門漁業者が最も多い。聖母宮があり、ブリ・イカの一本釣り漁業を専門とする世帯が極めて多い正村町、志賀神社の麓に位置する鹿ノ下東町・鹿ノ下仲町・鹿ノ下西町、勝本浦で唯一ワカメ漁を行う中折町などがある。

勝本浦の街なみ・ハママチとオカマチ：勝本浦の海岸線約3.5kmに沿って主要道路が通っており、この道路の両側に隙間なく人家が並んでいる。道路から浜側はハママチ、丘側はオカマチと呼ばれる。かつてはハママチの漁家は自宅のすぐ裏が海であり、そこに漁船を繋いでいた。現在では海岸沿いに道路が設けられ、ハママチに船を繋ぐ風景は見られなくなってしまったが、ハママチとオカマチの街なみが良好に保たれている。

関連する壱岐遺産

建造物：旧松本薬局店舗兼主屋

神社：聖母宮、志賀神社

その他：勝本浦の街なみ、朝市、郷ノ浦町元居・山崎浦・八幡・芦辺・渡良浦・瀬戸浦・君ヶ浦の街なみ



勝本浦の街なみ



関連する壱岐遺産の分布図（E-2 漁港）

E-3 海のまつり

壱岐は海に囲まれた島国であり、古くから航海の安全や豊漁祈願にまつわる信仰が根付いている。

壱岐の船競漕行事

船競漕とは櫓や櫂などを動かして船を進め、漕ぐ速さを競争することである。壱岐ではミーキブネ（御幸船）と呼ばれ、古くから祭礼行事や年中行事の一環として行われてきた。かつては郷ノ浦の漁村集落でも行われていたが戦後に途絶え、現在は勝本町の聖母宮の大祭（風本祭り、10月10～14日）で行われているのみである。

聖母宮のミーキブネは紅白に分かれた一の船と二の船で争い、一の船が勝てば大漁で浦が繁盛し、二の船が勝てば豊作で在が繁盛する、年占いの神事である。

御幸船と芦辺祭り囃子

芦辺浦の住吉神社例祭（旧9月7～9日）で神輿と御幸船を中心に舟祭神事が行われる。住吉神社で御幸船を受け、囃子方・漁船と共に港を太陽の廻る方向に3周し恵比寿神社で、商売繁盛、家内安全を祈願する。

御幸船は安永6年以前には存在していたとされ、現在の物は旧形を保ったまま昭和8年に新造された。

お囃子は約300年前に起こったとされるが、享保5年（1720）に若者寄合会によって組織され引き継がれていると言われる。囃子方は、大胴・鼓・鐘・受張・笛・三味線の約30名からなる。

船霊信仰

船霊さまは、古くより船と漁師の守護神であり、豊漁をもたらすとして祀られてきた。

漁師や海女には船霊さまが日常に根付いており、それぞれ方法は異なるものの、漁の前には船霊さまに安全と豊漁を祈願し、漁から戻ると船霊さまにその日の収穫を供え感謝する。また漁師が新船を造船する際には、船大工が船の中に船霊さま（勝本浦では2個の木製の厨子）を埋め込み、古い船から新しい船に船霊さまを移す。

関連する壱岐遺産

神社：聖母宮、寄八幡神社、馬ノ瀬の金刀比羅神社、和多津美神社

工芸品：御幸船

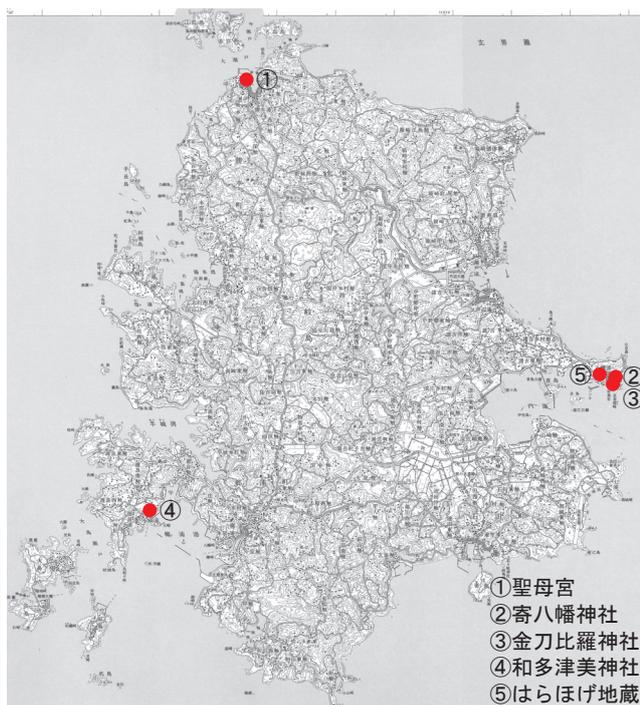
民俗：壱岐の船競漕行事（聖母宮のミーキブネ）、風本祭り囃子、芦辺祭り囃子、

石造物：はらほげ地蔵、

その他：龍神様、



聖母宮



関連する壱岐遺産の分布図（E-3 海のまつり）

E-4 伝統的な漁

壱岐島には、古くから八幡浦と小崎浦を拠点とし、岩礁や大小の島々、瀬を漁場として、海女・海士によるアワビ、サザエ、ウニ等の漁が行われ、現在でも漁が続けられている。

壱岐の産業としての漁で漁獲量の多いものは、イカ、ブリをはじめとする魚類、貝類、海藻など様々であるが、現在は機械化され伝統漁法によるものはほとんど見られない。その中で、近年まで専業者ではない人々が余暇などに行っていた漁には伝統的なものがみられる。

八幡の海女・小崎の海士

八幡の海女は伊勢海女の子孫と伝わる。漁には、フネカラ（船に乗り名島方面へ出て行く）とカチカラ（左京鼻付近の磯で行う）がある。1回の潜水時間60秒程度で約2時間の潜水作業を1日に3～4回繰り返す。年間の潜水日数は100～150日程度である。共同で作業し、採集したのも共同の経費とし、海女社会の相互援助や共同体意識が生まれた。

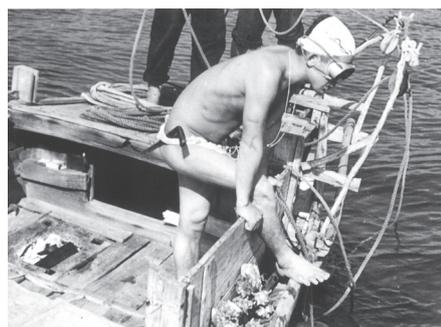
小崎の海士は、筑前国鐘崎の海士が豊臣秀吉朝鮮征伐の際に水先案内をした功により壱岐島での漁場権を得たとされている。伝統的なハダカモグリによる潜水法が行われていたが、現在は見られなくなった。

海女・海士は、親方、海士頭、浦長、組頭などによって組織されていた。八幡浦は小田栄左エ門家が、小崎浦は渡良浦の和泉屋と肥後屋がそれぞれ親方として海女・海士を支配していた。収穫したアワビは、明治～大正時代は親方（問屋）がメイホー（明鮑）に加工して出荷していた。この慣習が昭和初期まで残ったが昭和初期頃から鮮魚のまま島外へ出荷するようになった。

関連する壱岐遺産

文書：和船製作設計図2面

漁労具：海士・海女の道具（フンド石（小崎の海士）、アワビオコシ、アワビ袋、アワブガネ、イキヅナ、フンドシヅナ、メガネ、その他）、漁場



海士



海女

関連する壱岐遺産の分布図（E-4 伝統的な漁）

F. 肥沃な農地に伝わる暮らし。在・触の暮らし

F-1 散村の景観

壱岐の島全域に散村風景が形成されたことについては、島特有の地形と、平戸藩による土地割替制度、火災対策によると考えられている。

背戸山と前畑

多くの農家は南向きの斜面に4～8尺も土地を下げて宅地を作り東北西の三方は山や崖に囲まれ南面あるいは東西の1・2面のみを開く。この背後の防風林が背戸山であり、両脇のヘーシ（小さな土手と樹林）と共に海から吹き上げてくる冬の偏西風を防ぐ。

背戸山の落ち葉や枝材はその家で自由に利用できたので、背戸山の樹木は大切にされ、背戸山を狭くすることや、木を伐採して売ることなどは有り得ない事であった。

また各屋敷の前面に必ず畑があり前畑（まえばつけ）と呼ばれていた。平戸藩による土地割替制度の時代に田畑の永代所有が許されなかった時代でも、この前畑だけは屋敷の所有として認められており、そこで採れる作物で最低限の生活を得たと考えられる。この前畑も農家の人々は大切にし、抵当に入れることや売るとはよほどの事であり、前畑の作付けを行えば神を祀り内祝いをしたとも言われていた。

生活は極度に制限され、負担も重く、田畑も山も私有することができなかった農民にとって、宅地と背戸山、前畑は唯一の所有物だった。

この背戸山を持った屋敷による散村風景は現在でも残されている。

関連する壱岐遺産

その他: 在に見られる散村の風景、背戸山（せどんやま）と前畑（まえばつけ）をもった屋敷構え



背戸の山と前畑



郷ノ浦の触（散村風景）

F-2 農作のまつり

稲作や畑作だけに特化した大きなまつりはみられないものの、日常的に田の神様を祀る風習が残っている。

鋤入：旧1月2日。畑に鋤で穴を掘り、そこに粃殻を入れ生の女竹を3本立て旧15日に虫焼きする。

ショメンカキ：旧1月5～7日。神社か寺で護符（ゴー、ショメン）をもらう。

粥節句：旧1月15日。豊作の占い。

セジョー祭り：旧2月。農家の豊作祈願。

田植えサナブリ：旧5月。田植え修了の農家の祝い（慰労）。

イミ、夏越：旧6月29日。田の神を祀る、さねもり祈祷（虫追い）、田祈禱、農業を休む、井戸をさらう。

田の神迎え：旧11月。田の神様を迎え、豊作を感謝する。

この他、豊作祈願や五穀豊穰を願うまつりなど、年中行事と一体化しているまつりもある。

関連する壱岐遺産

民俗：鋤入れ、ショメンカキ、粥節句、セジョー祭り、田植えサナブリ、イミ・夏越、田の神迎え



さねもり祈祷

G. 豊かな島に育まれた生活文化

G-1 今に伝わる年中行事

壱岐に伝わる年中行事には、節句に関する行事や、稲作に関すること、漁や船霊さまに関すること、講、神社の例祭などがある。なかでも盆綱引とカヅラ曳きは特徴的なものといえる。

仁駄橋の盆綱引

仁駄橋は壱岐の伝統行事の一つである盆綱引の発祥の地とされ、8月14・15日に行われる。綱引きの綱は、竹を芯に巻き付けるように藁・カヅラを巻き、撚り合わせて1本の綱とするもので長さは25～30m、直径は30cm前後になる。それに1尺ごとにかかり縄（綱引する時に握る縄）を付ける。綱引きは興行元のカンジンモト（志原西触）とヨリキ（他地区）に分かれ、夜8時から12時頃まで行われる。盆綱引は亡者祭りの別称があり、綱を引かないと集落に病人が出る、作物に害虫が発生する、と言われる。

八幡浦のカヅラ曳き

旧8月13～15日の夜7時頃から、一筋道路（旧町並街道）をムカデ綱の先端に引き綱をつけ、東西にカヅラ綱を引き歩く。旧盆の精霊迎え・送りの行事と言われる。

関連する壱岐遺産

民俗：祇園山笠唄子太鼓、大原触開保地の盆綱引太鼓、仁駄橋の盆綱引太鼓、お経さん、八幡浦のカヅラ曳き



仁駄橋の盆綱引



カヅラ曳き

G-2 島に伝わる料理

島国でありまた肥沃な農地に恵まれた壱岐は、米・麦などの農産物、イカ、ブリ、ウニなどの海産物をはじめ、壱岐焼酎や壱岐牛のブランド食材等、豊かな食材に恵まれている。

古くから伝わる郷土料理には年中行事と結びついているものも多い。節句や稲作、忌みなどの際には、小麦粉やもち米などで作る“だご”が食べられていた。来客時のもてなしの料理である「ひきとおし」は、現在でも郷土料理として受け継がれている。また、スルメイカやブリ、ウニが祝いの席の食材に使用されることや、日常食でもヒジキやアオサなど海藻が多く用いられ、豊漁となった魚を工夫して料理することなどは島国ならではのといえる。

かつては、塩や味噌、醤油、豆腐等は各家庭で作られていた。中でも壱州豆腐はにがりの代わりに海水を用いていたとされ、現在でも一丁が大きく独特である。

海上運送が発達するまでは、海士漁によるアワビは干し鮑（メイホー）に、漁獲量の多いイカはスルメイカに加工され、島外に出荷していた。スルメイカの加工はかつては加工業者が行っていたが、戦後には加工技術が漁師家庭にも伝わり、自家加工することも増え、現在でも港周辺ではイカを天日干しする様子が見られる。

年貢として納める必要のなかった麦を利用して造られるようになった壱岐焼酎は、平成7年にWTO（世界貿易機関）により地理的表示に指定されている。また中世より飼育が推奨されてきた壱岐牛も現在ではブランド牛としての価値を高めている。

関連する壱岐遺産

その他：水産加工品、壱岐焼酎、壱岐牛

慶弔・年中行事の料理・主菜：ブリのおまぜ、ささげ入りおにぎり、赤飯、ウニ入り押しずし、ウニめし、ずうしい（雑炊）、鏡もち、米もち、かんころもち、トツカケメシ

副菜：まきするめ、ぐれ和え、おひら、ひろうず（がんもどき）、ひきとおし、のっぺり、ウニ入り卵焼き、煮ぶたし、そば切り、おなます、つきあげ

菓子：のべだご、田植えだご、ふつだご、かしわだご、えつけだご、あれつけだご、おはぎ

日常食・主菜：磯めし、さざめし、あわめし、かんころねり、魚の茶漬け、デーハー、かぼちゃ素麺の折込み、こうばし、こうさ焼き

副菜：ひじきの油炒め、およごし、青さの佃煮、白和え、ゆべし、壱州豆腐、焼きぜー、鯨なます、めがらみ、メカブトロロ、ぬくめぜー、だご汁、冷や汁、イカの黒ゴマあえ、エソ蒲鉾

菓子：ふつもち（ヨモギ餅）、かきもち・こりん



ひきとおし

G-3 今も伝わる方言・地名

壱岐の方言は壱州弁ともいわれる。近世は平戸藩に属していたが、本土とは離れているため独自性がある。壱岐方言は大別すると農村、町家、漁村の三分区されるが、標準は農村言葉である。全島で言葉の差はあまりないものの島の東西、南北で小差がみられる。特に勝本浦の言葉には独特のものがある。

また、山頂を「ツジ(辻)」、井戸を「カワ(川)」、断崖を「タキ(滝)」というのは独特である。他に、季節用語となった「春一番」は、安政6年(1859)に元居浦から漁に出た7艘の漁船が強風を受け、漁師53人が遭難した事故によって広まったと伝わる。

壱岐弁のアクセントは東京式アクセントの変種で、島内大部分の地域は福岡県筑前地方(福岡市周辺)のものに近い。しかし勝本地区などは若干異なるものもある。

壱岐弁の文法は、九州方言同様、下二段活用の動詞を持つ。動詞の否定過去には、「行かじゃった」「行かやった(行かなかった)のように、「-じゃった」「-やった」を用いる。形容詞は「良か」のようなカ語尾を用いる。「から」にあたる理由・原因を表す接続助詞には「けん」や「せん(しえん)」、「けれども」にあたる逆接の接続助詞には「ばってん・ばって・ばってかー」が使われる。

敬語の動詞「ござる(いる・来る)」があり、本動詞や補助動詞として用いられる。また敬語の助動詞として「しゃる(例:行かっしゃる)や「んす(例:行かんす)」がある。

また、壱岐では地名も独特であり、島内の地名には概ね、農村地域の集落には「触」、漁村地域の集落には「浦」が付く。

「触」の語源には諸説あるものの、主に2つの説がある。

中世の壱岐は100の村に分かれていたと言われ、江戸時代に「24村98触」に区分されていた記録が残る。中世の村がそのまま近代の触になったと言われ、村は古代において“ムレ”“フレ”と読まれていた発音の名残で“フレ”触になったとの説。

もう一つは、江戸時代の享保年間(1716～1734年)に藩が制定した行政区画の名残。藩から庄屋への通達文書を“お触書”と呼び、そのお触書を地区に伝える役職を触役(ふれやく)と呼んでいた。触役が担当した区域を触とした結果、その区割りが現在まで残ったとする説。

このように壱岐独特の言葉や地名が濃厚に残っている。

関連する壱岐遺産

その他：壱岐弁、地名

H. 壱岐の文化を育んだ島の風土

H-1 特徴的な地形・地質・鉱物・奇岩

島の土台（基盤）は古第三紀（約3千万年前）に海底で堆積した勝本層と呼ばれる砂岩や泥岩からなる。これを玄武岩溶岩が広く覆っている。壱岐層群は新第三紀中新世（約1800万年前～500万年前）の地層や岩石からなる。芦辺層群は鮮新世（500万年前～200万年前）に形成される。この頃から続いた活発な火山活動による溶岩で緩やかな丘陵地が形成され、噴出した火山砕屑物で岳の辻や津の上山などが形成された。

壱岐島の海岸沿いには、これらの地層が表出し地質学的に貴重な資料が見られる。

郷ノ浦町の初瀬の岩脈は、地元では白滝と呼ばれ、玄武岩（黒）が流紋岩（白）を貫いている様子が分かる。芦辺町の元松崎海岸に見られる大石古流型（漣痕）は勝本層で、2500万年前以前の形成と考えられ、対馬の対州層群と一体をなすものと考えられている。

長者原化石層の珪藻土層から夥しい量と種属の化石が発見されている。植物化石からは、現在の壱岐市に現存する照葉樹林との近縁性が窺われ、珪藻土層の堆積地は淡水性環境が強かったことが分かる。また魚類化石は、淡水魚類化石群として種類の豊富さは日本随一であり、大陸系の要素を多く含む。生物・地理的にも学術的価値が高く、昭和46年（1971）に発見されステゴドン象化石と合わせて、日本と大陸との関係を解明する上で重要である。

この他にも島内には、猿岩や左京鼻、鬼の足跡などの奇岩、また辰の島にも蛇ヶ谷をはじめとする奇岩が見られる。

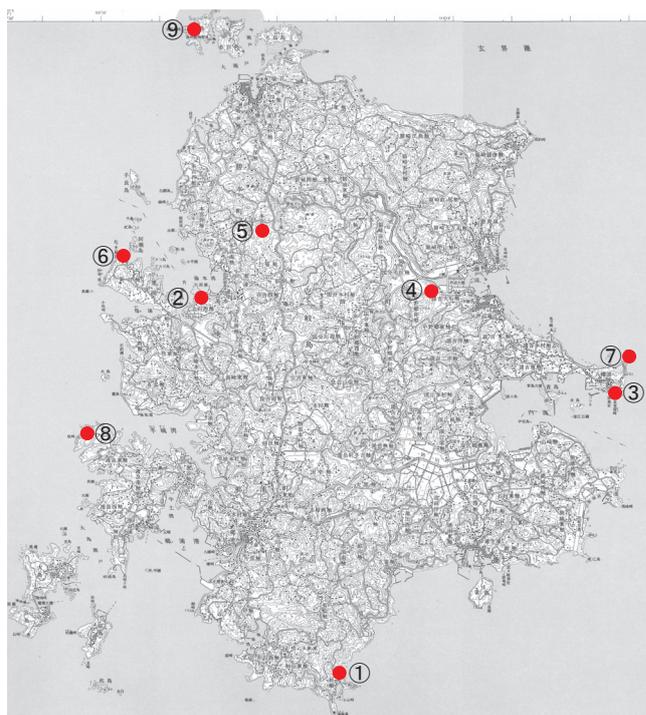
関連する壱岐遺産

地層：勝本層群、壱岐層群、芦辺層群、郷ノ浦層群

地質：初瀬の岩脈、ステゴドン象化石産出地、長者原化石層、大石古流型（漣痕）

岩石：玄武岩、石英斑岩、安山岩、流紋岩、ステゴドン象化石

奇岩：猿岩、左京鼻、鬼の足跡、蛇ヶ谷



初瀬の岩脈

- ①初瀬の岩脈
- ②ステゴドン象化石産出地
- ③長者原化石層
- ④大石古流型（漣痕）
- ⑤炭焼の岩脈
- ⑥猿岩
- ⑦左京鼻
- ⑧鬼の足跡
- ⑨蛇ヶ谷

関連する壱岐遺産の分布図（H-1 特徴的な地形・地質・鉱物・奇岩）

H-2 壱岐島の植物

辰の島海浜植物群落は低地に多種の海浜植物が繁茂する。中でもハイビヤクシン（ソナレ・イワダレネズ）の群落は類例が少なく貴重である。

その他、島内の植物には、南方系・熱帯性植物の分布の北限が数多く見られる。スキヤクジャクはアジアンタム属の美しいシダで、地下の短い茎から数枚の葉が出る。環境省の近危急種（準絶滅危惧）に位置付けられる希少な植物であるが、壱岐では島南部の志原に自生する。アコウは幹や枝から出た気根が幹や他の樹木、岩等に絡みつく常緑高木。渡良のアコウは県内の分布の北限とされる。

関連する壱岐遺産

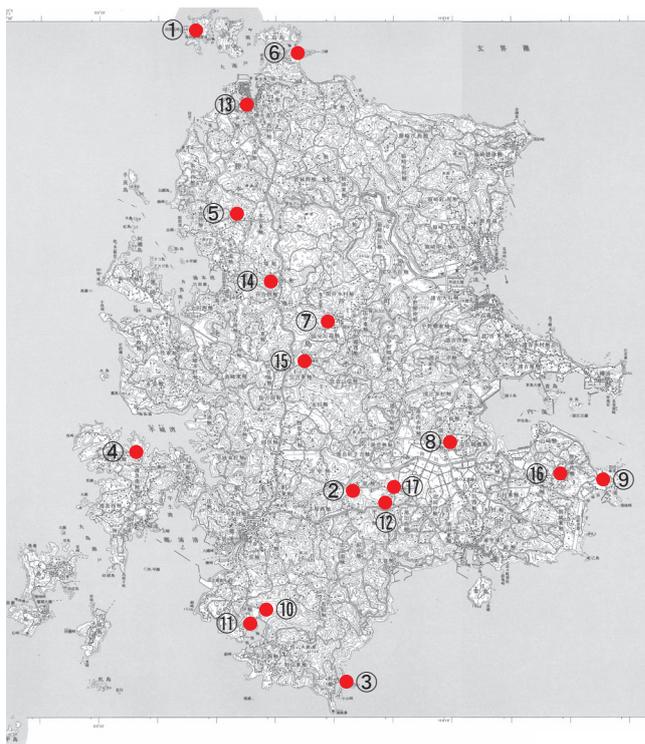
植物：辰の島海浜植物群落、渡良のアコウ、志原のスキヤクジャク群落、鏡岳神社社叢、報恩寺のモクセイ、安国寺のスギ、国分のヒイラギ、白沙八幡神社社叢、平人触のエノキ、初山海岸のホウライシダ群落、大山祇神社の社叢、能満寺のウメ、水神社のイチョウ、住吉神社のクスノキ、池田西触のウメの老木、筒城仲触のイヌガヤ



辰の島海浜植物群落



安国寺のスギ



- ①辰の島海浜植物群落
- ②志原のスキヤクジャク群落
- ③鏡岳神社社叢
- ④渡良のアコウ
- ⑤壱岐報恩寺のモクセイ
- ⑥勝本のハイビヤクシン群落
- ⑦国分のヒイラギ
- ⑧安国寺のスギ
- ⑨白沙八幡神社社叢
- ⑩大山祇神社の社叢
- ⑪初山海岸のホウライシダ群落
- ⑫山川家のエノキ
- ⑬能満寺のウメ
- ⑭水神社のイチョウ
- ⑮住吉神社のクスノキ
- ⑯イヌガヤ（犬樫）
- ⑰梅の老木

関連する壱岐遺産の分布図（H-2 植物）

H-3 壱岐の港と海岸の景観

海岸線は複雑で島の西海岸は複雑なリアス式海岸、北と南は海食崖が発達し、東海岸は砂浜が広がる。昭和43年には壱岐の島の海岸の景勝地を中心に壱岐対馬国定公園に指定され、また昭和53年に辰の島・手長島・妻ヶ島が海中公園地域に指定されている。

壱岐の土台である勝本層が見られる天ヶ原海岸、辰ノ島の蛇ヶ谷、万葉集にも記された雪の島などの海食崖が見られる一方で、東海岸には筒城浜、大浜、錦浜、清石浜、小水浜などの美しい砂浜が広がる。

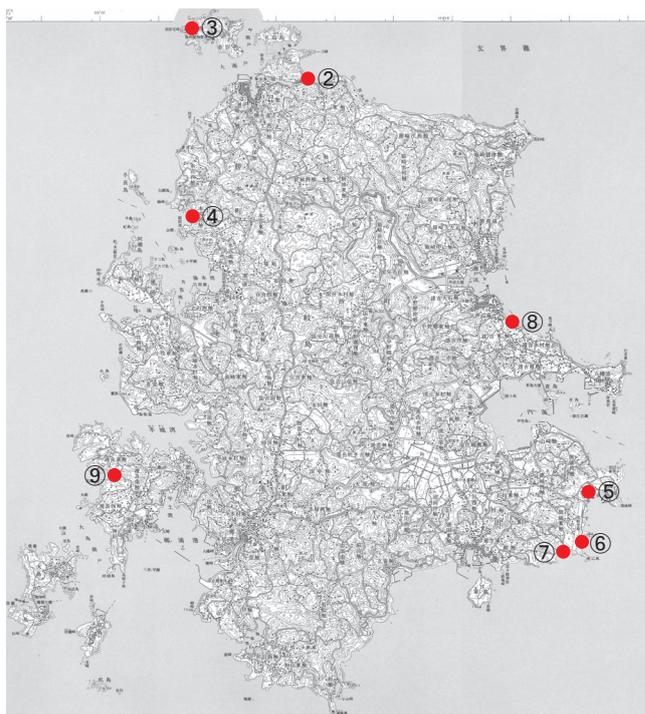
また壱岐・対馬の海にはサンゴ礁があり、主にキクメイシ、キッカサンゴ、カワラサンゴによって3千年前から作られたと考えられている。

関連する壱岐遺産

自然：壱岐対馬国定公園、

海岸：天ヶ原海岸、炭焼の岩脈、蛇ヶ谷、雪の島

砂浜：筒城浜、大浜、錦浜、清石浜、小水浜



- ① 壱岐対馬国定公園
- ② 天ヶ原海岸
- ③ 蛇ヶ谷
- ④ 雪の島
- ⑤ 筒城浜
- ⑥ 大浜
- ⑦ 錦浜
- ⑧ 清石浜
- ⑨ 小水浜



蛇ヶ谷

関連する壱岐遺産の分布図 (H-3 港、海岸の風景)

I. 壱岐にまつわる偉人のものがたり

壱岐は多くの偉人を輩出している。

実業家では、漁業家として壱岐の漁業の発展に貢献し「漁業の神様」と呼ばれた中上長平や、近代日本の「電力の鬼」・「電力王」と冠され、今日の日本経済発展の一端を担った松永安左エ門、朝鮮事業界や壱岐の発展に多大な貢献を残した熊本利平らがいる。現在は、松永安左エ門の生家に松永記念館があり、また熊本利平によって建てられた住宅である碧雲荘や、利平が久邇宮邦彦王妃倪子殿下より賜った花雲亭が偉業の一端を伝えている。

郷土史や文化に関係した人々として、建仁寺派の管長を務め、仏教の発展のため僧侶の教育と育成に全力を注いだ僧侶の竹田黙雷、「壱岐郷土史」や「壱岐神社誌」をまとめた後藤正足、壱岐の学校教育の向上に貢献した本田清信、「雨の唄」・「冬の唄」などの名作を世に送り出した詩人・三富朽葉、「壱岐島の方言集」・「壱岐国史」・「壱岐国地名誌」などをまとめ、原の辻遺跡の存在を全国区へと導いた第一人者の一人でもある山口麻太郎、壱岐の植物研究を続け、長崎県指定天然記念物スキヤクジャク群落の発見など多くの功績を残した品川鉄摩、つくば科学博覧会の公式ポスターや長崎県関連の観光ポスター、壱岐焼酎ラベルのイラストを手掛けた長岡秀星など、多彩である。

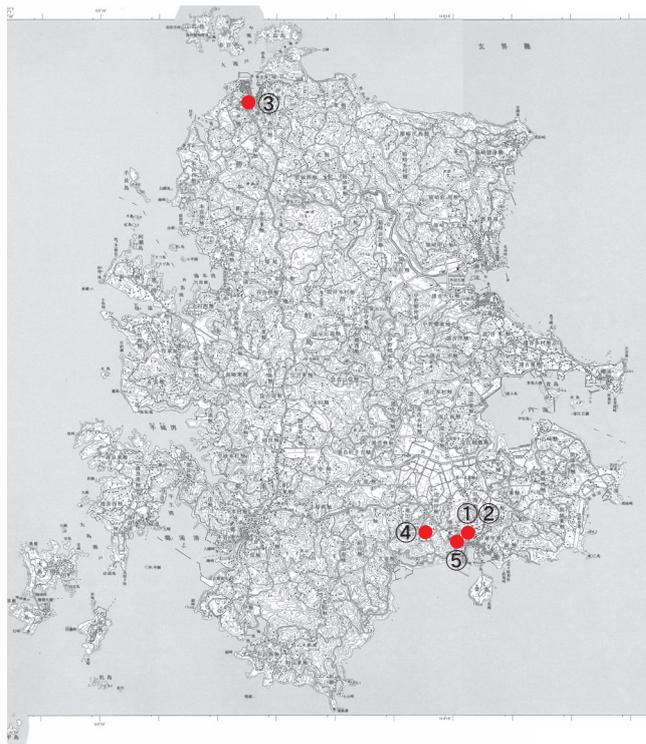
また、遣新羅使として壱岐で病死した雪連宅満や、幕府の諸国巡見使随員として壱岐に寄港した際に病死した河合曾良は、それぞれ墓がまつられている。

関連する壱岐遺産

建造物：碧雲荘（主屋・門・石垣）、花雲亭

石造物：俳人・曾良の墓、遣新羅使・雪連宅満の墓

文化施設：松永記念館



曾良の墓



花雲亭

- ①碧雲荘
- ②花雲亭
- ③曾良の墓
- ④雪連宅満の墓
- ⑤松永記念館

関連する壱岐遺産の分布図（I 壱岐にまつわる偉人のものがたり）